

県営圃場整備事業(伊那市手良地区)

—緊急発掘調査報告書—

山伏塚古墳・向田・ 鳴神・竜の沢遺跡

1987

伊那市教育委員会
上伊那地方事務所

県営圃場整備事業(伊那市手良地区)
—緊急発掘調査報告書—

山伏塚古墳・向田・
鳴神・竜の沢遺跡

1987

伊那市教育委員会
上伊那地方事務所

序

山伏塚古墳・向田・鳴神・竜の沢遺跡はすべて伊那市手良野口地籍に所在しています。この四カ所の遺跡付近は、棚沢川の河岸段丘面及び棚沢川の支流である竜の沢川が形成した河岸段丘面、山麓扇状地面に存在し、段丘崖面には多量の清水が湧出しています。

大正末年ごろ来伊して上伊那地方の遺跡を克明に調査され、「先史及原史時代の上伊那」を出版された鳥居龍藏博士は、これらの遺跡の重要性を同著の中で詳細に述べています。

たまたま、圃場整備事業が施行されることになり、昭和61年8月中旬から12月中旬まであしかけ4カ月間にわたって発掘調査を行うこととなりました。

発掘調査を実施した面積は凡そ3000m²および縄文前期終末期土壙1基、奈良時代住居址2軒、その他多量の遺物が発見されました。

この報告書は調査成果をまとめたものであり、このような成果をおさめ得たことは、長野県教育委員会、地元の方々をはじめ直接発掘に従事された調査団の団長、調査員、作業員の皆様のご尽力の賜であり、ここに深く感謝申し上げるとともに、この報告書が、今後教育文化の向上に活用されることを切に願って止みません。

昭和62年3月

伊那市教育委員会

教育長 宮下 安人

まえがき（山伏塚古墳・向田・鳴神・竜の沢遺跡の環境）

位 置

山伏塚古墳・向田・鳴神・竜の沢遺跡は長野県伊那市手良野口に所在する。伊那市街より前述した古墳・遺跡に至る道順を述べると次のようになる。杖突街道を東へ高遠町方面へ向かって約5km程行くと美篶上原集落がある。この集落の東はずれで杖突街道と別れて左折し、北へ向かい段丘崖面の林を登りつめると広々とした平坦な穀倉地帯が続いている。末広の集落の東はずれを通り、約2km程北へ行くと手良中坪八幡宮の交差点に至る。この地点よりさらに東に向かい、上村部落を通り抜けば伊那山脈の山麓に到着する。中坪と野口との境に伊那山脈に源を発する竜の沢川が東から西へ流れ、やがて棚沢川と合流する。棚沢川と合流する地点に山伏塚古墳が、竜の沢川右岸河岸段丘最末端部に向田遺跡、中流地域に鳴神遺跡、上游地域には竜の沢遺跡がそれぞれ存在している。

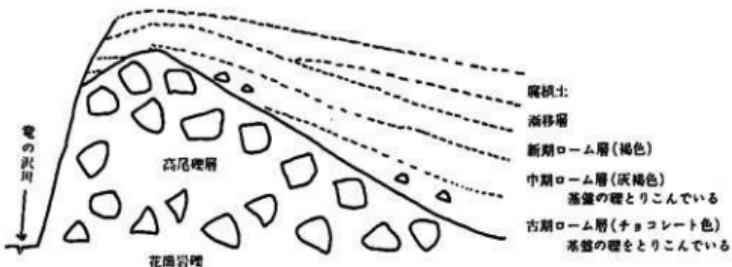
地形・地質

伊那谷の地形・地質を極めてみると次のようなことが考えられる。中央アルプス（木曾山脈）、南アルプス（赤石山脈）、赤石山脈の前山である伊那山塊（伊那山脈）との間に形成された伊那の地形・地質は中央部を諏訪湖を源とし、延々二百数十km東流して、太平洋に注ぎ込む天竜川が龍蛇の如く流れ下っている。

天竜川を本流とし、その支流である小河川が東、西側に数多く存在し、それらによって堆積・浸蝕、運搬がなされ、大小様々な扇状地、河岸段丘、溪谷が発達している。伊那市近隣付近も、小沢川、三峰川等に代表される幾つかの大小河川によって扇状地、河岸段丘が形成され、これが竜西（天竜川の西側）に5段、竜東（天竜川の東側）に8段形造されている。

今回、報告書に掲載する山伏塚古墳・向田・鳴神・竜の沢遺跡は伊那山脈を源とする竜ノ沢川、棚沢川によって形成された河岸段丘山麓扇状地面に立地している。前述した二河川によって形成された一般的な地形を『浜弓場遺跡緊急発掘調査報告書』の中より掲載すると次のようになる。竜ノ沢川、棚沢川の形成した段丘は高尾段丘と呼ばれる段丘で、伊那谷では最も古い段丘の一つである。伊那谷の河岸段丘は、古い方から、塩嶺面、高尾面（I・II）、大泉面、神子柴面（I・II）、南殿面、木ノ下面（I・II・III）と発達している中の高尾面に相当する段丘面である。

遺跡地付近は、鮮新世の所産である凝灰角礫岩層（火山性の灰、安山岩、その他異種の入りこんだ岩層）が伊那山脈の花崗岩が基盤となり、その上に高尾礫層（遺跡地域では、後背山地である伊那山脈から運搬された花崗岩のくされ疊層）が堆積し、さらに御岳火山に起源を持つ、南信州型ローム層が風成で堆積した。このローム層は、厚いところでは11~13.5mになっているところもある。

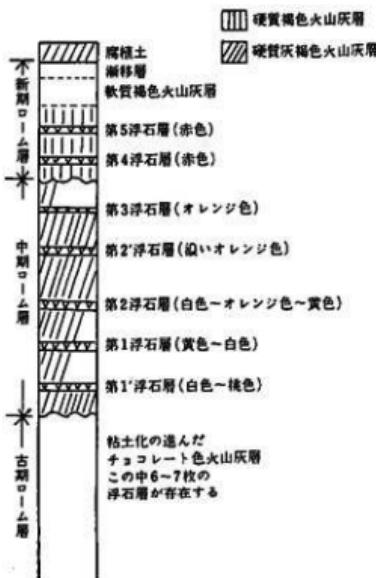


遺跡模式地層図

このローム層は、三層に分類され、下部から、古期・中期・新期ローム層と呼ぶ。中期ローム層は神子柴段丘面を形成した。神子柴礫層と同時層であり、新期ローム層と一部同時層は、南殿・木ノ下段丘面を形成した。南殿礫層、木ノ下礫層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲである。また、高尾面を形成した高尾礫層と一部同時層となるローム層は、古期ローム層である。なお、古期ローム層中には6枚、中期ローム層中には5枚、新期ローム層中には2枚の浮石層が存在する。これら浮石の多くは、放射年代が判明している。第4浮石層は約3万年前とされている。

遺跡地は、伊那山脈の花崗岩を基盤となし、その上に棚沢川、竜の沢川によって運搬され、堆積した高尾礫層によって形成された扇状地で北西に傾斜している。この扇状地の南側は竜の沢川によって浸蝕され、高尾礫層の露出を見る。

高尾礫層の良好な露出場所としては手良中坪にある清水庵の崖があげられる。この礫層の上位に古期ローム（チョコレート色）が堆積し、中部ローム層が降灰し、堆積し、新期ローム層が降灰するまでに時間的間隔があり、風化され一部が残り、その上に新期ローム層の降灰がある。



南型信州ローム層模式柱状図

周辺遺跡の歴史的環境

手良地区は天竜川左岸地域（所謂竜東地区に属し、天竜川によって形造された河岸段丘と、三峰川、棚沢川あるいはその支流によって形成された河岸段丘、複合扇状地が骨格をなし、その上に厚いローム層が覆っている。手良地区は全般的にみて、棚沢川周辺に濃密な遺跡の点列分布帯が広がっている。天竜川左岸第一河岸段丘面は標高690m位に存し、弥生時代から平安時代頃までの遺跡が数多く、ほぼ一直線状に並び、その中に混在して、40基に近い牧・福島古墳群が集中的に存在している。

伊那山脈山麓地域に分布する手良地区的遺跡の大半は標高720m～790mの範囲に属している。手良地域の南端には土王田川が西へ流れ、この川の南側は通称六道原と呼ばれ、古来より、美篌地区の一部に六道地蔵尊が祀られている。手良の地名が歴史の舞台に登場するのは近隣伊那地方では古く、平安時代承平5年（935年）倭名類聚鈔に手良郷が初見されている。

手良の地名の語源発生については古くより豆良公の称する帰化人が居住していたと伝承されている場所が竜の沢川の奥地にみられ、この場所は通称「大百濟毛」、「小百濟毛」と呼ばれている。手良地区に散在する遺跡数は、約50箇所を数える。棚沢川は伊那山脈鉢伏山（1455m）に源を発し、全長約9kmを流れ、福島集落の南側で天竜川と合流する。

棚沢川の両岸には小さな扇状地が数多く展開し、これらの扇頂部には山麓特有の湧水が各所にみられている。このような所は絶好な居住地帯であり、先史・原史・古代・中世・近世を通じて村落形成には理想的な地形である。今回報告書としてまとめる山伏塚古墳、向田・鳴神・竜の沢遺跡は前述したような地理的条件を備えた好事例の一つであろう。

手良地区における縄文早期遺跡としては浜弓場、所洞、ワランベ、松太郎塗の四遺跡が上げられる。浜弓場遺跡は宅地造成を行うことで、昭和47年11月29日から12月19日にかけて伊那市教育委員会が中心となって緊急発掘調査を実施した。調査の結果、縄文早期焼石群3基、縄文中期竪穴住居址4軒、平安時代竪穴住居址2軒、中世の土壙1基であった。土器としては斜縄文、横円押型文、山形文と横円文の組み合わせ、田戸下層式、鶴ヶ島台系、茅山下層系、茅山上層系、花積式、閑山式、黒浜式、五領ヶ台式、下小野式、井戸尻式、加曾利E式、土師器、須恵器、灰釉陶器、内耳土器。

縄文中期の遺跡としては所洞、辻垣外、地神原、宮の平、東松、鳴神、狐垣外、松太郎塗等々がみられる。縄文晚期の遺跡としては野口遺跡がある。この遺跡は火葬墓発見と言うことで全国的に有名である。弥生時代の遺跡としては砂場遺跡がある。砂場遺跡は昭和52年に発掘調査を実施した。その結果、弥生後期の竪穴住居址2軒、古墳時代の住居址2軒、平安時代の竪穴住居址4軒の検出をみた。矢塚・山伏塚古墳はかっては存在したが、現在は消滅してしまっている。中世の遺跡としては昭和60年度に緊急発掘調査を実施した堤林・島崎遺跡があげられる。前者の遺跡からは永楽通宝、中世陶磁器片、後者の遺跡からは水溜め遺構、中世陶磁器片がそれぞれ検出された。近世の遺跡として上村遺跡があげられ、昭和54年度に緊急発掘調査を実施し、寛永通宝6枚、人骨、キセルが出土した。

（飯塚政美）



地形および遺跡分布図

遺跡の名称

1 潤 山	10 矢 塚	19 東 松	小百済毛	36 六 道 原	44 汗 西 幅	52 林 越
2 ヨキトギ	11 野 口 塚	20 古 八 塚	28 近 洞	37 野 口	45 鳥 峠	53 普
3 蟹沢桜林	12 金 山	21 鐵治塙外	29 上 村	38 下手良中	46 塙 林	54 富 土
4 ワランベ	13 電 の 沢	22 中 原	30 杜 宮 地	原	47 出 の 田	55 吉 里
5 入 林	14 鳴 神	23 石 見 堂	31 宮 の 平	39 大 原	48 神 手 原	56 城 山
6 大 上	15 山 伏 霧	24 二 十 平	32 砂 場	40 松太郎塙	49 日 向 塙	57 漢 弓 場
7 孤 塙 外	16 九 山	25 地 神 原	33 清 水 洞	41 南 塙 外	50 笠 原 塙	
8 鳥 ノ 宮	17 向 回	26 小 荻 原	34 鶴 の 呼	42 角 城 外	51 塙 下	
9 辻 塙 外	18 堂 塙	27 大百済毛	35 柿 の 木	43 塙 外		

凡　　例

- 1、今回の発掘調査は県営圃場整備事業に伴なう、土地改良事業で、第3次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
- 2、この調査は県営圃場整備事業に伴なう緊急発掘で、事業は上伊那地方事務所の委託により、伊那市教育委員会が発掘調査団を結成し、発掘調査団に事業を委託して、実施した。
- 3、本調査は、昭和61年度中に業務を終了する義務があるため報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
- 4、本文執筆者は次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

◎図版作成者

・遺構および地形

友野良一	飯塚政美
小木曾清	飯塚政美

◎写真撮影

・発掘及び遺構・遺物

友野良一　飯塚政美

- 5、本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があたった。
- 6、遺物及び図面類は伊那市考古資料館に保管してある。

発掘調査の経過

発掘調査の経緯

手良地区の土地改良事業は昭和 52 年度に中坪地区で最初に着手致しました。この事業に伴なって砂場遺跡の発掘調査を実施致しました。昭和 54 年度には中坪上村部落の水田一帯が土地改良事業区内に含まれるとのことと、事業実施前に施工地区内に存在する上村遺跡の緊急発掘調査を行いました。昭和 60 年度事業地区内は手良ハツ手地区であり、この中には堤林・島崎両遺跡が含まれております、夏場に発掘調査を実施致しました。

昭和 60 年度団体営小規模排水対策特別事業を手良野口蟹沢地区で実施致しました。この中には蟹沢桜林・入林・ワランベの三遺跡が含まれており、夏場から初冬にかけて発掘調査を実施致しました。

昭和 61 年 6 月 10 日 上伊那地方事務所長と伊那市長との間で『埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書』を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。発掘調査に着手する前に、伊那市教育委員会を中心にして山伏塚古墳・向田・鳴神・竜の沢遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を遂行することとした。

昭和 61 年 7 月 30 日 山伏塚古墳の発掘調査通知を提出する。

昭和 61 年 9 月 10 日 向田遺跡の発掘調査通知を提出する。

昭和 61 年 10 月 13 日 鳴神遺跡の発掘調査通知を提出する。

昭和 61 年 11 月 19 日 竜の沢遺跡の発掘調査通知を提出する。

調査の組織

山伏塚古墳・向田・鳴神・竜の沢遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長 宮下 安人 伊那市教育委員会教育長

副委員長 北村 誠 伊那市文化財審議委員会委員長

委員 山口 豊 伊那市教育委員会委員長

調査事務局 村山 幸義 伊那市教育委員会教育次長

〃 蟹沢 典人 〃 社会教育課長

〃 矢沢 巧 〃 〃 課長補佐

〃 宮原 強 〃 〃 係長

〃 飯塚 政美 〃 〃 主任

〃 高木いづみ 〃 〃 主事

発掘調査団

団長 友野 良一 日本考古学協会会員
副団長 根津 清志 長野県考古学会会員
" 御子柴泰正 "
調査員 銀塙 政美 日本考古学協会会員
" 小木曾 清 宮田村考古学友の会会長

〔作業員名簿〕

三沢寛 柴佐一郎 大野田英 堀橋程三 大野田三千代 酒井とし子 大久保富美子 白鳥桂介
伊藤勝 蟹沢治江 伊藤菊次 上島正延 登内かずえ 小松善恵 小松栄子（敬称略順不同）

図 版



遺跡地を西側より眺む



遺跡地を東側より眺む

図版二 ゲリット発掘状況及び古墳に使用した石



ゲリット発掘状況

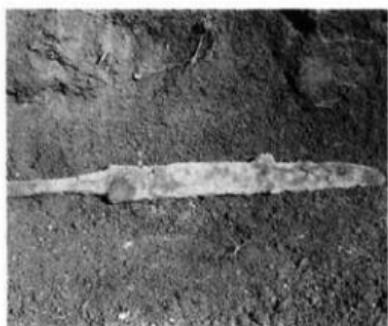


石室に使用した大石

図版三 遺物出土状況



鉄製品出土状況



鉄製品出土状況



鉄製品出土状況



土面出土状況



土器出土状況



土器出土状況



直 刀



鐵 鎌



土 面



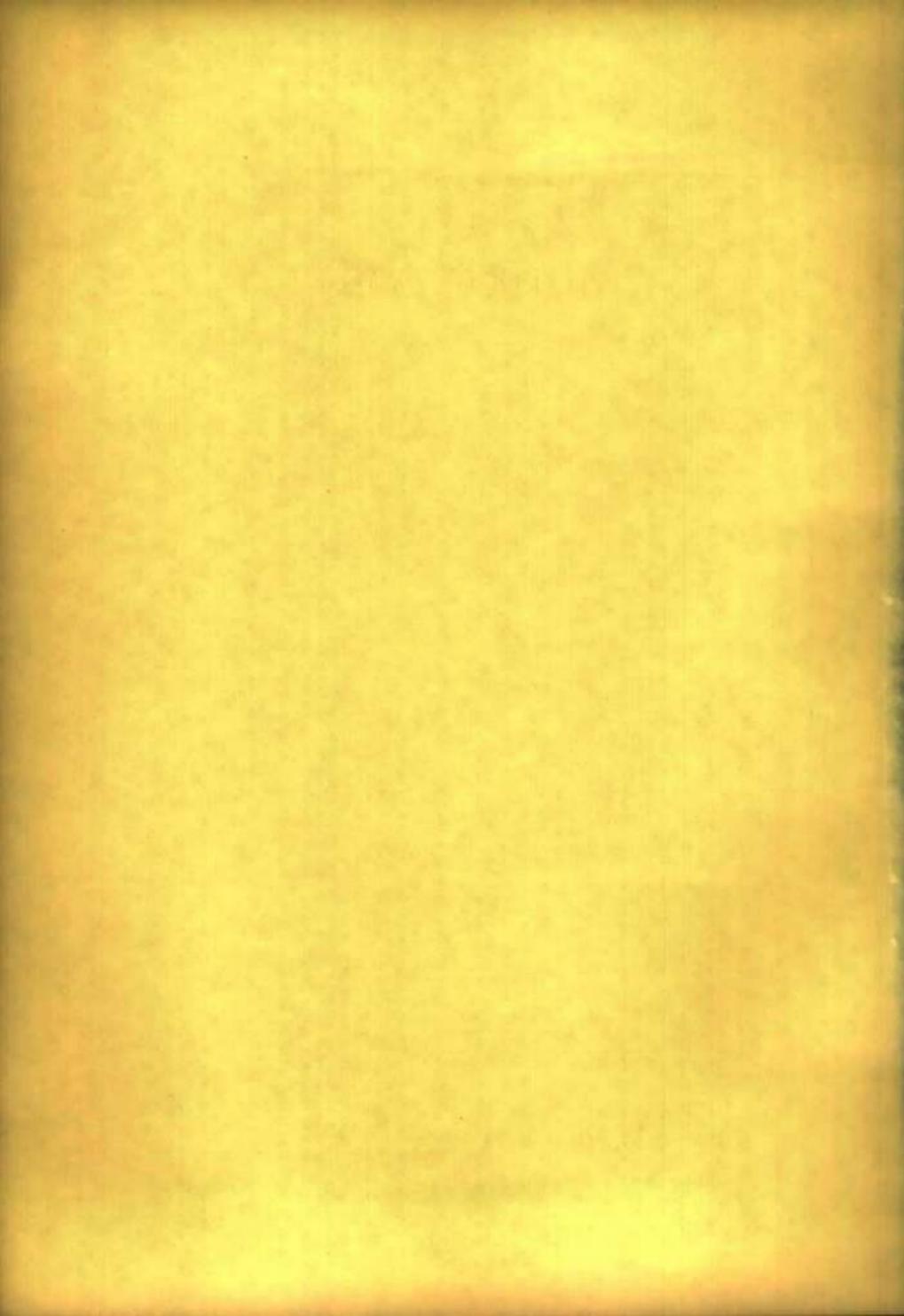
ミニチュア土器



深鉢型土器

向田遺跡

山伏塚古墳



目 次

目 次.....	(3)
挿図目次.....	(3)
図版目次.....	(3)
第Ⅰ章 発掘日誌.....	(5)
第Ⅱ章 遺 構.....	(6)
第Ⅲ章 遺 物.....	(8)
第1節 土 器.....	(8)
第2節 石 器.....	(11)
第3節 土製品.....	(13)
第4節 鉄製品.....	(14)
第Ⅳ章 まとめ.....	(15)

挿図目次

第1図 地形及び遺構配置図.....	(7)
第2図 土器拓影.....	(9)
第3図 土器拓影.....	(10)
第4図 土器実測図.....	(10)
第5図 石器実測図.....	(12)
第6図 石器実測図.....	(13)
第7図 土製品実測図.....	(14)
第8図 鉄製品実測図.....	(14)

図版目次

第Ⅰ章 発掘日誌

昭和61年8月19日 晴 山伏塚古墳へ移る準備をし、堂垣外遺跡へ設置しておいたテントをとりこわす。発掘調査道具の修理をする。

昭和61年8月20日 晴 前日と同様の作業をする。テントをとりこわし、明日、テントを建てる準備をする。

昭和61年8月22日 晴 時々雨 テントを取りこわしたのを山伏塚古墳へ運搬する。テントを竜の沢川の右岸の小高い所に、東西に長く建てる。

昭和61年8月26日 晴 発掘地点の草刈りを実施する。

昭和61年8月27日 晴 昨日に引きつづき、草刈りをし、グリットを設定する。

昭和61年8月28日 晴 雁高様の慰靈祭を実施し、祠の近くに花や線香を捧げる。雁高様付近の北西隅の一角より掘り下げていくと、耕土は浅く、その下に砂利層が覆っていた。この砂利層は水田下の地場層を兼ねていた。それをとりのぞくと黒土層が厚くあり、その中には多量の加曾利E式土器片があった。

昭和61年8月29日 晴 雁高様の石祠をとりのぞいて下を掘り下げていくと、中から直刀2振、鉄鎌2点が出土した。

昭和61年9月1日 晴 昨日に引きつづき、石祠の下を掘り進めていくと、多量の縄文土器が出土した。付近の写真撮影、実測を終了する。石祠の直下（土台状の石）付近から鬼高期の土師器の出土があったが、古墳としての決め手となるような遺構は発見されなかった。

昭和61年9月2日 晴 近くの古老に尋ねてみると



発掘風景（夏場施工地区）



雁高様の祠

と、かつて山伏塚古墳のあったところは現在掘っているところより若干ずれているとのことであった。従って、秋、収穫後もう一度グリット掘りをして古墳の実態調査することにした。今まで出土した多くの遺物の清掃をし、出土状態の写真をとる。

昭和 61 年 9 月 5 日 晴 テントのあとかたづけを実施する。発掘を実施した地点の全測図を作成する。

昭和 61 年 12 月 1 日 晴

本日より山伏塚古墳の周溝の確認ができるかどうか調査を開始する。グリットを東から西へ A ~ G、南から北へ 1 ~ 10 とし、A 1、A 3、C 1、C 3 のように 1 つ置きにグリット掘りをする。A ラインは浅く、G ラインへ行くに従って黒土が深くなっていた。どのグリットからも縄文中期の土器石器片が多量に出土した。

G 9 付近の褐色土から縄文後期のミニチュア土器と土面が出土した。

昭和 61 年 12 月 2 日 晴 昨日に引きつき、山伏塚古墳の周溝の発見につとめるが、何も周溝は発見されなかった。本日、午後、発掘器材の一部を伊那市考古資料館へ運搬する。

昭和 61 年 12 月 5 日 本日、発掘器材を全て洗い、午後、伊那市考古資料館へ運搬する。全測図の作成をする。

昭和 61 年 12 月 ~ 昭和 62 年 2 月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集、それを印刷所へ送り込む。校正も行う。

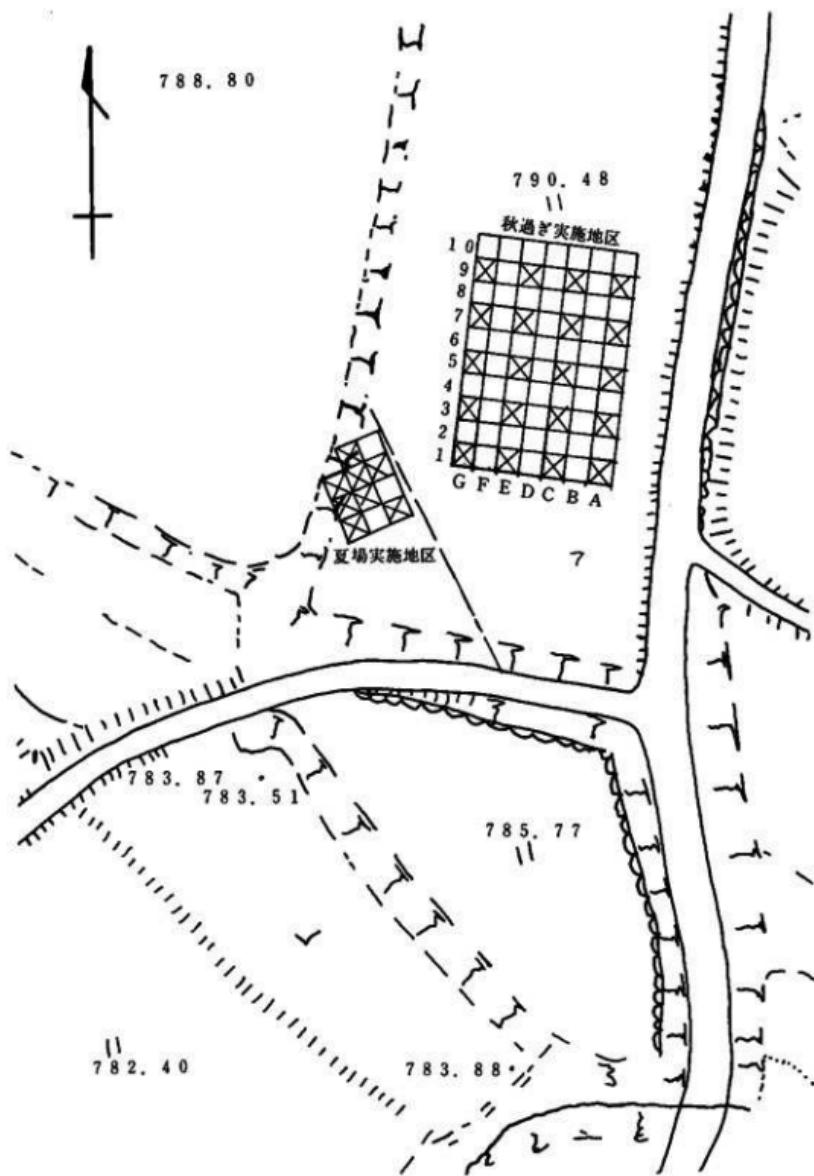
昭和 62 年 3 月 報告書を刊行する。

第 II 章 遺構

今回の発掘調査では求める山伏塚古墳の墳丘及び周溝の確認は全くできなかった。おそらく、水田造成時に大規模な土取りが実施され、その時点で墳丘及び周溝あるいは付属施設など全く破壊されてしまったのであろう。ただ、古墳が存在した事実を実証するものとして、直刀、鐵鎌、鬼高一期土師器片が出土している。



発掘風景（秋場施術地区）



第1図 地形及び造構配置図 (1 : 500)

第III章 遺 物

第1節 土 器 (第2~4図)

第2図土器拓影に掲載した土器片は全て縄文中期に属している。(1)はわずかに外反する口縁部破片で、器厚は5~7mm位を測り、中厚手に含まれている。口縁直下には無文、破片の中央部付近に断面三角形状の隆帯を区画状に貼り付け、その上に刻目を付け、隆帯によって区画された中に沈線が横位梢円状にめぐらされてある。黒褐色を呈し、少量の長石を含み、焼成は良好である。縄文中期初頭梨久保式に含まれると思われる。

(2、4~5)は隆帯が隆盛する時期の土器片である。次に隆帯の貼り付け方及び細部の文様構成をみてみよう。(2)は口縁部が若干肥厚する。口縁上部から一本の隆帯が垂下し、その上を沈線にて蛇行状の意匠文を工夫してつけてある。口縁上部の隆帯付近には刻目を付け、口縁中部付近には隆帯を境界線にして断面方形状の沈線が數条縱走している。赤褐色を呈し、少量の長石を含み、焼成は良好である。(4)は隆帯を梢円形状に配し、その上に刺突文を付け加え、それらの中に沈線を斜走してあり、これらは一見、櫛形文風に見える。赤黄褐色を呈し、雲母を含み、焼成は良好である。(5)は破片の左端に幅広ろ、低い隆帯を縦位に貼り付け、それに直角状に隆帯を二本平行状につけてある。この上に刺突文をつけてあり、これらの中に沈線を平行状、あるいは三角形状に施してある。赤褐色を呈し、少量の長石を含み、焼成は良好である。(2、5)は藤内期、(4)は井戸尻期に属していると思われる。

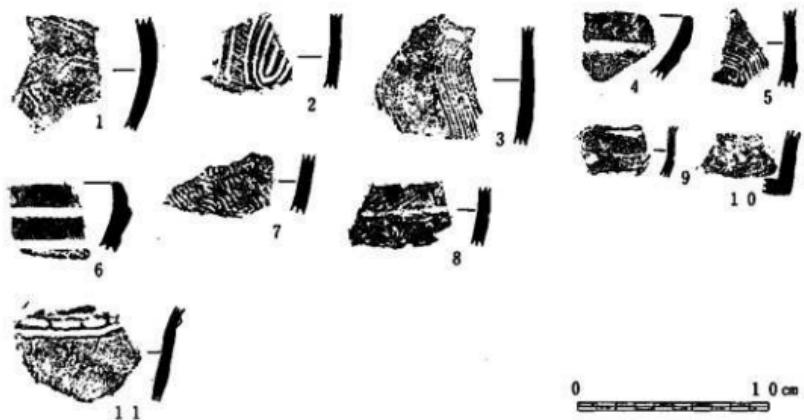
(3)は先端が鋭角の沈線が縦横に走り、区画文を形成している。明茶褐色を呈し、焼成は中位で、少量の長石粒を含む。藤内期の土器片であろう。

(6~7)はキヤタビラ文様風の見られる土器片である。黒褐色(6)、明茶褐色(7)を呈し、両片とも少量の雲母を含み、焼成は中位である。藤内期に含まれると思われる。(8~9)は一般的に言われている櫛形文の発達が著しい特徴点である。赤褐色(8)、黄褐色(9)を呈し、(8)は焼成は良好、それに対し(9)は中位である。井戸尻III式に編年づけられる。

(10)はキヤリバ一型を呈する深鉢型土器の口縁部近くの破片と思われる。文様は上部では無文帯、刺突による点列文が横帯状に配される。中・下部にかけては斜縄文地へ沈線の懸垂文が垂下している。縄文地帶の中に結節縄文が付加されて、文様効果を増している。黒褐色を呈し、焼成は中位、少量の長石、雲母を含む。加曾利E II式に含まれる。(15)の諸特徴は(10)とはほぼ同じであるが、隆帯状の懸垂文が走っているのが特徴である。(12)は斜縄文地へ弧状沈線が施されている。赤褐色を呈し、少量の長石を含み、焼成は良好である。(14)はやや内反する口縁部破片である。破片下部に幅広ろの隆縫がやや曲線状を描き、その上に横帯点列文が連続的に並走している。黒褐色を呈し、焼成は良好、少量の長石を含む。加曾利E II式と思われる。(16)は下地に細沈線が漠然と存在し、その上に太目の沈線が蛇行状に垂下している。明茶褐色を呈し、焼成は中位、少量の雲母、長石を含む。



第2圖 土器拓影



第3図 土器拓影

(17)は細い沈線がほぼ同心円状に配されている。黒褐色を呈し、少量の雲母を含み、焼成は良好、(18)は斜繩文、沈線懸垂文、無文とが組み合わさって文様を形造している。茶褐色を呈し、焼成は中位、多量の雲母を含む。(17~18)は加曾利E II式くらいと想定される。(19)は無文地に沈線を走らせたり刺突文が加味されている。赤褐色を呈し、少量を雲母を含み、焼成は良好である。曾利期の最末期の土器片であろう。

第3図の土器拓影は繩文後・晚期土器を主体にして掲載した。
 (1)は無文地で黒色研磨され、その上に入組文風の沈線が施されている。黒褐色を呈し、焼成は良好で、少量の雲母を含む。
 (2)は繩文と沈線を長楕円形状に配してある。茶褐色を呈し、焼成は中位で、少量の雲母、長石を含む。

(3~5)は細かい沈線が文様の主体を成している。色調は黒褐色(3、5)、赤褐色(4)を呈し、焼成は3片とも中位である。(6)は無文地へ沈線を二本横走させてある。黒茶褐色を呈し、多量の雲母を含み、焼成は良好である。(7~9)は極めて薄手の土器片であり、繩文が主体となって器面全体を装飾してある。(8、9)は横位の磨消繩文がみられ、加曾利B式の極だった特徴点を描出している。色調は赤褐色(7)、黒褐色(8~9)を呈している。(7)の焼成は中位(8~9)のそれは良好である。(7)の内面には炭化物が黒々と付着していた。(10)は綱代底を呈している。赤褐色を呈し、焼成は中位である。(11)は無文地が主体を成している。破片上部には沈線と、細い沈線を長方形状に区画した文様とが加味されている。黒茶褐色を呈し、多量の雲母を含み、焼成は不良のために内壁はボロボロの状態であった。



第4図 土器実測図 (1:4)

第4図(1)はグリット内より出土した縄文中期後葉加曾利E I式のほぼ完型品に近い土器である。口縁径11.6cm、現存器高18cm位を測る深鉢型土器である。口唇部から口頭部にかけては無文、口頭部から胴部にかけては文様の主役を粘土紐が成している。上部と下部に一本ずつ粘土紐が横位に、それらに囲まれた中に四つの太い粘土紐をクロス状に組み込ませて大きな把手状の突起を構成している。この四つの把手状突起に囲まれた中に細い粘土紐を二段にわたって貼り付けてある。下段は左上、右下がり、上段は右上、左下がりである。胴部は捺糸文地へ細い沈線を長楕円形状に施し、その中に三角形状の沈線文を連続的に配している。胴下部の欠損部分は製作時の輪積痕と思われる。黒褐色を呈し、焼成は良好、少量の鉱母を含む。

第4図(2)はグリット内より出土した縄文後期のミニチュアの完型土器である。口縁径2.3cm、底部径4.9cm、器高3.0cm位を測る。底部は網代底を呈している。内・外表面ともに研磨されている。茶褐色を呈し、少量の鉱母を含み、焼成は良好。

第2節 石 器 (第5~6図)

前節で述べたように縄文中期土器片が多量に出土した。本節で述べる石器も全て縄文中期に属していると思われる。石器の形態は打製石斧、磨製石斧、砥石、大型石匙、凹石、磨石等である。

打製石斧 (第5図(1~5))

打製石斧は他にも多く出土しており、破損品の出土量が多い。ここでは割合に残存状態が良好のを5点図示した。(1~2)は硬砂岩製で上部が欠損し、下端部がほぼ平行線をたどる短冊形である。(3)は硬砂岩製で、重量がかなりある。中央部が極端に幅広くなる分銅型を呈し、上端をわずかに欠損している。(4)は粘板岩製、(5)は砂岩製である。ともに下端部が開く楔形を呈し、極端に断面が薄い。

磨製石斧 (第5図(6~11))

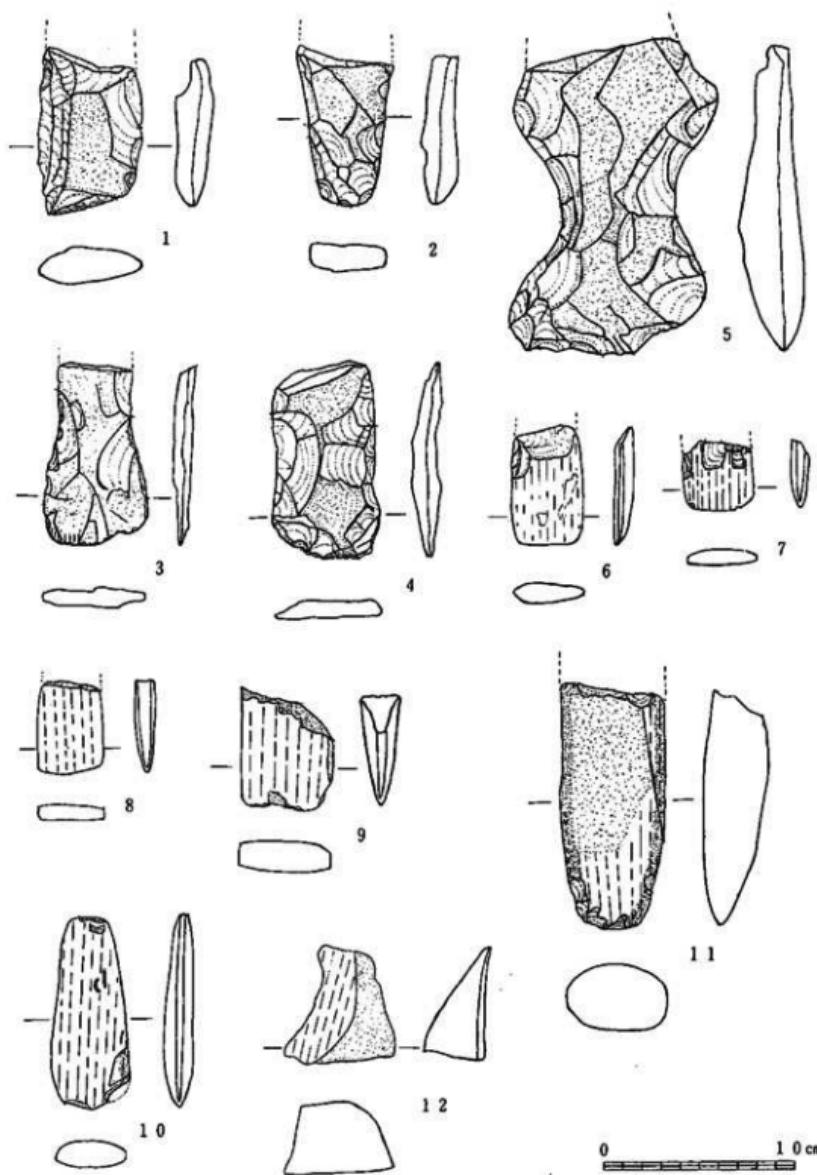
(6~9)は小形磨製石斧である。基部と刃部の幅が等しく長方形を呈している。刃部は薄く仕上げられている。上端は欠損し、基部は表裏と直角の面をなし、両面は丁寧に磨き上げられている。緑泥岩製である。(10)は基部に対し、刃部が若干開き気味であり、全般的には長方形状を呈す。刃部は薄く仕上げられており、左先端刃部がわずかに欠損している。緑泥岩製で、研磨は全面に及んでいる。(11)は大型の乳棒状磨製石斧の欠損品である。緑色の閃綠岩製で、部分的に研磨されているだけで、全般的に自然面を多く残す。

砥石 (第5図(12))

方形状の石を磨いて砥石として利用している。節理より完全に半剖になっている。緑泥岩製であって、擦痕が残存している。

石匙 (第6図(1~2))

硬砂岩製で、両面に自然面を多く残しているが、二次加工は刃部のみに集中している。いわゆるつまみの付く大型石匙で、刃部は鋸歯状で、ほぼ直線状を呈す。



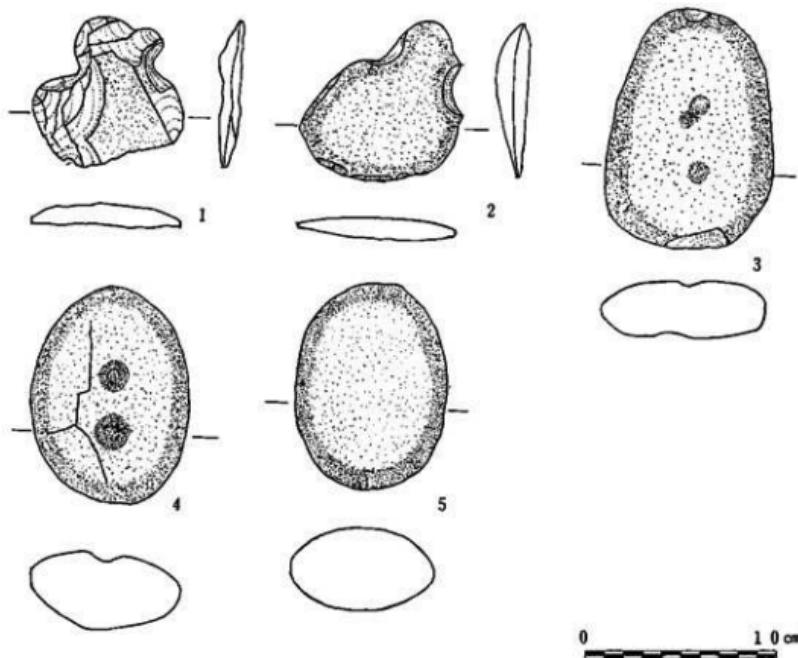
第5図 石器実測図

凹石（第6図（3～4））

硬砂岩の円礫を利用して凹石を作り出してある。（3～4）の両面ともに二つの凹みがある。ところどころに打撲痕が認められる。

磨石（第6図（5））

硬砂岩の円礫を利用して磨石としてある。磨った個所はほんのわずかで、大部分に自然面を残し、ところどころに打撲痕がある。

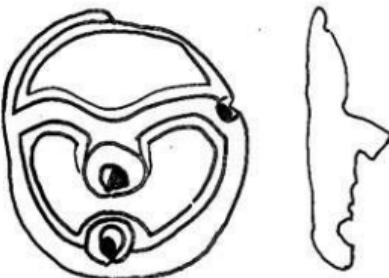


第6図 石器実測図

第3節 土製品（第7図）

G9グリットより出土した土製品である。直径4.5cm位の円板状を下地とし、円周に沿って一本の沈線をめぐらせてある。右上端部は欠損している。中心付近に隆帯を高く突起状に、このところから左右に弧状に低く、細い隆線がみられる。この隆線直下に沈線が弧状に走る。高い突起状隆帶

の下間に円形状の凹みが施されている。下端に円形状の刺突文がみられる。以上、文様特徴を述べてきたがそれぞれの文様の意義づけを考えてみよう。円周沿の沈線は顔の輪郭、突起状の隆帯は鼻、下向の穴は鼻孔、左右の弧状隆帯は眉毛、円形状の刺突文は口をそれぞれ象徴していると思われる。この土製品の裏側をみると、他の者に付着していた痕跡がみられる。従って名称にはとまどう。仮りに、他の者に付着していたとすれば土偶に着く仮面状のものであったとも考えられる。黒色研磨され、でき上がりが良好である。縄文後期の頃に位置づけられよう。

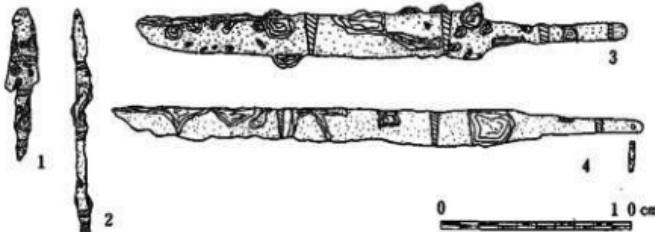


第7図 土製品実測図(1:1)

第4節 鉄製品(第8図(1~4))

第8図(1~2)は鉄鎌である。(1)は身幅1.8 cm位、長さ8 cm位、厚さ3 mm位の平根鎌の一種であり、断面は扁平である。(2)は鉄鎌の中基であって、先端は欠損している。(3~4)は直刀である。(3)は現長25.6 cm位、(4)は現長27.8 cm位を計る。鍊者及び刀先、柄の部分は特に腐蝕の進行度合が高いので、その原形は不明である。(4)の柄の部分には目釘が残存していた。山伏塚古墳を破壊して、封土を運搬し、その上に雁高様を祭った。第4図に掲載した鉄製品は全てこの雁高様の土台石の下から出土した。従って山伏塚古墳の石室内に埋められたものであり、7世紀前半頃に位置づけられよう。

(飯塚政美)



第8図 鉄製品実測図

第Ⅳ章 ま と め

山伏塚古墳の発掘調査において遺構類の検出は全く無かった。ただ遺構の検出は何も無かったが相当量の遺物の出土をみた。遺物を時代別にまた用途別に述べていくことにする。

縄文時代の土器一文様及び土器の特徴は前節で述べてあるので今回は省略し、ここでは考古学的に基づく編年方法で、それを羅列しておくことにする。

梨久保式 藤内式 井戸尻式 加曾利E式 加曾利B式 堀の内式 安行式 大洞式

第4図(2)のミニュチュアの土器は極めて少ない。縄文後期には相当量のミニュチュア土器が出土しているが、いづれも縁部が開き気味を呈している。これに反し、今回出土のは口元がつばまっている。一般的にミニュチュア土器はぐいのみに使用されたと考えられている。

第7図に掲載された縄文時代の土製品は土面にするか、他の者に付着していたのが離れたのではないかとの二説が考えられる。筆者が、この土製品の裏側を見て判断するに、わずかではあるが、円形状に他の者から離れた痕跡が認められる。このことが事実とすれば、辰野町郷土美術館に展示してある仮面付土偶(現在、長野県宝指定)に類似するのではないだろうか。

縄文時代の石器—今回の発掘調査で出土した石器は全て縄文中期頃に位置づけられ、それらの形態は打製石斧 磨製石斧 砕石 大型石匙 凹石 磨石等であった。

第8図の鉄製品は山伏塚古墳の石室内埋葬されたものであろう。山伏塚古墳は明治後期まで存在したのであるが、その後の水田造成時に封土は完全に押し去られてしまった。現存していた時は円墳で、横穴式石室を有していたと古老は語ってくれた。古墳の封土の一部は雁高様の下に埋めたのであった。

鉄製品は鉄鎌2点、直刀2点であった。鉄製品と一緒に出土した土師器からみて、7世紀前半頃の古墳と推測される。

(飯塚政美)



目 次

目 次	(3)
挿図目次	(3)
図版目次	(3)
第Ⅰ章 発掘日誌	(5)
第Ⅱ章 地 層	(6)
第Ⅲ章 遺 構	(6)
第Ⅳ章 遺 物	(8)
第1節 土 器	(8)
第2節 陶 器	(10)
第3節 石 器	(10)
第4節 古 銭	(12)
第Ⅴ章 まとめ	(13)

挿図目次

第1図 グリット地層図	(6)	図版1 遺跡遺景
第2図 地形及びグリット配置図	(7)	図版2 グリット設定及び地層
第3図 土器拓影	(9)	図版3 発掘終了後のグリット状況
第4図 石器実測図	(10)	図版4 遺物出土状況
第5図 石器実測図	(11)	図版5 出土遺物
第6図 古銭拓影	(12)	

図版目次

第Ⅰ章 発掘日誌

昭和 61 年 9 月 17 日 曇時々雨 山伏塚古墳より向田遺跡の梅林へテントを建てて。テントは 1 張り建てて、側壁にシートをかけて道具置場とする。発掘器材を運搬する。

昭和 61 年 9 月 18 日 曇

時々晴 梅林の中に、梅の木の株間に一松状にグリット掘りを実施する。耕土は浅く、20 cm 位しかなかった。かつては水田としたとみえて地場層がみられた。若干土器片が出土した。

昭和 61 年 9 月 19 日 晴

グリット掘りを北へ、北へと掘り進めていく。梅林の中央よりやや北側は深く、下の褐色土層まで 1 m を越していた。遺物の出土はややあった。

昭和 61 年 9 月 20 日 曇時々雨 グリット掘りをさらに北、東へ進めていく。土器片及び石器は若干出土する。遺構の確認は何もなかった。午後は雨降りが急になってきたので道具の整備をする。

昭和 61 年 9 月 22 日 晴 グリット掘りをさらに北、東へ掘り進めていくと、表土から約 2 m 位下に砂層の堆積がみられた。遺構の確認は何もなかった。縄文中期土器片、灰釉陶器片の出土があった。

昭和 61 年 9 月 24 日 晴 グリット掘りを梅の東側（現在トウモロコシ畑利用）へ入れる。縄文中期土器片、須恵器片、灰釉陶器片の出土がやや多くなってきた。遺構の検出は何もなかった。ここも黒土層の堆積が厚くなっていた。

昭和 61 年 9 月 26 日 晴 前日と同様な作業を実施する。弥生時代後期の土器片が多量に出土したので、付近を拡張する。

昭和 61 年 9 月 27 日 晴 昨日、検出された弥生時代後期の土器集中地区付近を拡張する。多量の弥生時代後期土器片が出土するが、遺構とは決めがたい点が多く含まれていた。

昭和 61 年 10 月 3 日 晴 弥生時代後期の土器集中地区付近を拡張する。遺物の検出は多量にあったが遺構の検出は何もなかった。土師器、須恵器、灰釉陶器、石錘、鉄くそ、縄文中期土器片が出土した。

昭和 61 年 10 月 6 日 晴 土器集中出土地区の西側、梅畠によった地区を拡張する。相変わらず、遺物はかなり出土したが、遺構は何も検出できなかった。黒曜石の石錐が出土。



発掘風景

昭和 61 年 10 月 7 日 曜 トウモロコシ畑へグリットを設定する。1つ置きに掘り進めていく、トウモロコシ畑の中央部付近は深く、砂層の堆積が多く、どうも河が流れた傾向が強くみられた。南側へ行くに従って浅くなり、わずか 30 cm 位でローム層に達した。遺物は中央部付近の河の流れた地区に集中していた。

昭和 61 年 10 月 8 日 晴 前日と同様な作業を行う。

昭和 61 年 10 月 9 日 晴 本日、一応、トウモロコシ畑全面にわたってグリットを入れてみると、遺構の確認はなかった。だが、遺物は相当量の出土をみた。本日をもって現場の発掘調査を終了する。道具の片付け。

昭和 61 年 10 月 15 日 晴 向田遺跡のあとかたづけをして、次の鳴神遺跡への移動準備をする。全測図と地層図を作成する。

昭和 61 年 10 月 20 日 晴 向田遺跡の最後のあとかたづけをする。

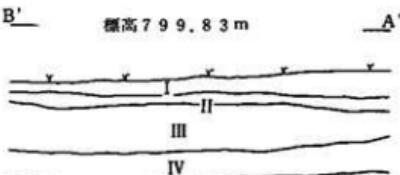
昭和 61 年 12 月～昭和 62 年 2 月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集、それを印刷所へ送り込む。校正も行う。

昭和 62 年 3 月 報告書を刊行する。

第 II 章 地 層

今回の発掘調査を実施した個所は、現況は梅畑であった。畑にしては現況が極めて平坦であったが、発掘調査を実施してみると、耕土の下に地場層が存在しており、かつては水田に利用した事実が明瞭になってきた。発掘調査地区の南側は 30 cm 前後でローム層に達したが、北側の方は 2 m 近く掘り下げるローム層が現われてこなかった。従って、北側の地点は溝状に深くなっていたものと推測され、堆積土の中に砂質分の混入が多くみられた。

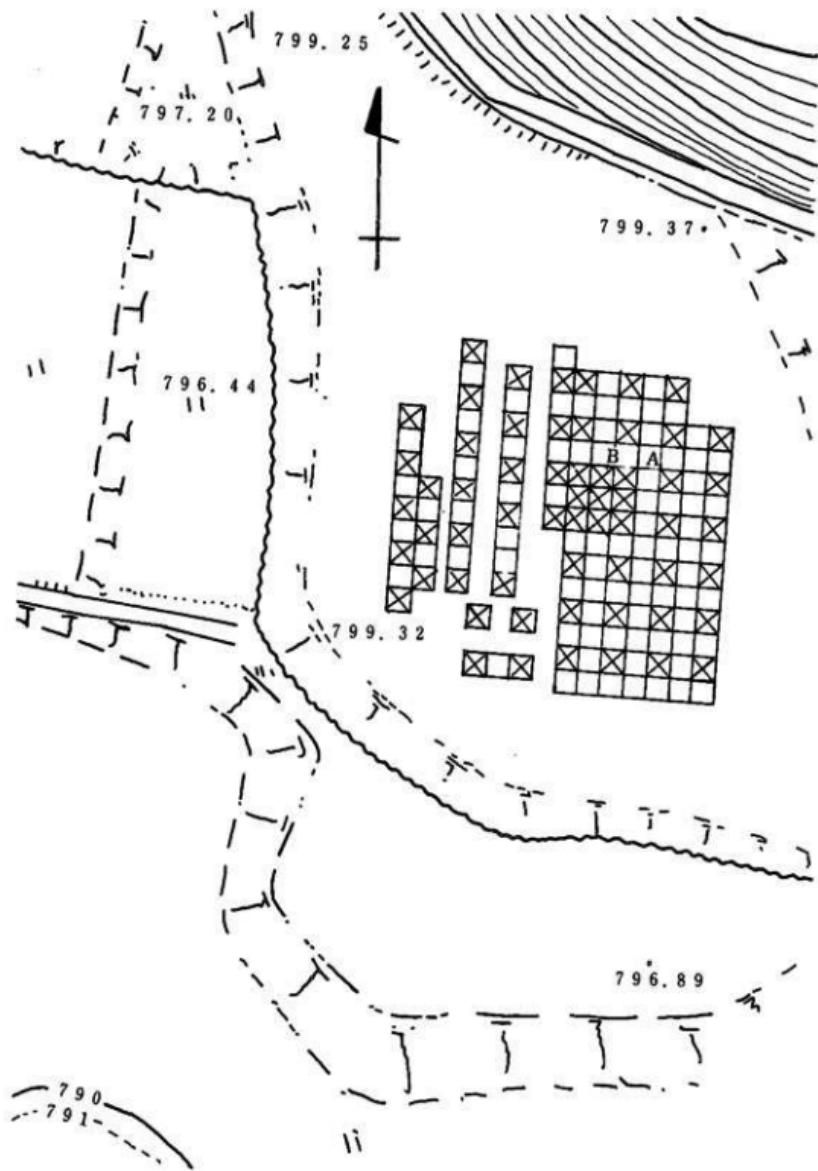
北側地点の堆積土を上から層序順に記すと次のようになる。耕作土、水田の地場層、茶褐色土層(乾性の細砂を含む)、黒褐色土層(粘性の細砂を含む)、黄褐色土層(細砂を含む)(第 2 図参照)



第 III 章 遺 構

今回の発掘調査では遺構の検出は全くなかった。しかし、出土遺物は割合に多く、しかも破片は磨耗状態が進んでいた。

第 1 図 グリット地層図



第2図 地形及びグリッド配置図 (1 : 500)

第IV章 遺 物

第1節 土 器 (第8図)

今回掲載した土器片は全てグリット内からの出土した。第8図(1~3)は胎土中に纖維を含んでいる一派である。(1)は無文地に小さな円形刺突文や刻目を押捺してある。茶褐色を呈し、焼成は中位で、少量の長石粒を含む。外面にわずかに貝殻条痕文が斜走している。壁面に黒々と纖維質の炭化粒が認められる。赤茶褐色を呈し、焼成は中位である。(3)は無文地が全部を占めている。拓影にみられる沈線は発掘調査時につけられた傷である。(1~3)は縄文早期末葉の茅山系統の土器片と思われる。

(4)は椭形文の発達がみられるもの。破片の下部に弧状に低い隆帯を貼り付け、その上に刻目を押捺し、それらに囲まれた中に先端を尖らせた沈線が継走している。赤褐色を呈し、少量の長石を含み、焼成は中位。内壁に少量の炭化物を含む。(5~7)は幅広ろの低い隆帯をカーブをゆるやかに付け、その上に刻目を付けてある。赤褐色(5)、黒褐色(6)、茶褐色(7)を呈し、3片とも少量の長石、雲母を含み、焼成は中位である。井戸尻III式と思われる。

(8~11)はやや幅広ろの斜縄文が施されているもの。赤褐色(8、10~11)、黒褐色(9)を呈し、焼成は中位で、少量の石英粒や長石粒を含んでいる。4片は井戸尻期に含まれていると思われる。(13)は器面に撚糸文を斜走させてある。赤褐色を呈し、焼成は中位で、少量の雲母を含み、内面に炭化物が微量付着している。井戸尻期の土器片と思われる。

(14)は無文地へある程度の間隔をおいて細沈線がほぼ平行状に継走している。黒褐色を呈し、多量の雲母を含んでいるために、内外面ともにピカピカ光を放っている。焼成は良好である。縄文中期初頭の梨久保式の一派と思われる。(15、18)は外面斜縄文地に一条から数条にわたって懸垂文が発達しているもの。黄褐色(15)、赤褐色(18)を呈し、少量の長石を含み、焼成は中位である。

(16)は無文地へ懸垂文を垂下させてある。黒褐色を呈し、焼成は中位である。(14~16、18)は曾利II式頃と思われる。(17、19)は無文地に沈線を八字状に施してある一派。ともに、赤褐色を呈し、焼成は中位である。(17、19)は曾利期の新しい方に属していると思われる。

(20)は無文地へ幅広ろの沈線を肋骨文風に配してある。黒褐色を呈し、多量の長石を含み、焼成は中位である。隆帯を渦巻文状(21、23)に、懸垂文状(22、24)にそれぞれ意匠してあり、隆帯によって囲まれた周辺にはヘラ先による八字状沈線を無作為に施してある。色調は黒褐色(21、23)、赤褐色(22、24)を呈している。(25)は口縁に近い部分の破片であり、無文地に三本の隆帯と三本の沈線が交互に横走している。赤褐色を呈し、長石を含み、焼成は中位である。(20~25)は曾利期の中頃と思われる。

(26)は中厚手の土器片であり、無文地へやや幅広ろの沈線を弧状に配してある。黄褐色を呈し、焼成は中位である。縄文後期壠の内式の一派と思われる。相当量の土器片の出土をみたが、縄文後期の土器片はここに掲載した一片のみである。

(27~29) は櫛描波状文が盛隆する弥生後期の土器片であり、波長の乱れからみて中島式の一派と思われる。赤褐色を呈し、雲母を含み、焼成は中位である。

(30) は土師器の大きく外反する口縁部破片であり、外面及び内面の口縁部付近には櫛目文が見事にみられる。煮沸に使用されたとみえて、炭化物が多量に外面に附着していた。堅く焼きしめら



第3図 土器拓影

れており、黒色を呈している。(31~32)は須恵器の破片であり、叩目文様が丁寧に調えられている。(30~32)は平安時代初期頃の産と思われる。

第2節 陶 器 (図版5)

この節に掲載した陶器片は古・中・近世を主体としたものである。図版5の(1~2)は猿投窓の灰釉陶器鉢の底部であり、11世紀前半頃の所産である。(2)には重ね焼きの痕跡が明瞭である。

(3)は室町後期の古瀬戸天目茶碗である。(4)は室町後期の古瀬戸天目茶碗の口縁破片である。椿窓の産と思われる。

(5)は室町後期の古瀬戸灰釉おろし皿の口縁部破片である。現存する破片の下部におろし皿独得の刻目が施してあると思われる。

(6)は瀬戸灰釉管型湯呑の底部破片であり、江戸時代後期の産である。

以上の破片を時代的に大別してみると次のようなことがいえる。(1~2)は古代の陶器、(3~5)は中世の陶器、(6)は近世の陶器である。今回の発掘調査では中国産の陶磁器類は何も出土せず、全て日本産であった。

第3節 石 器 (第4~5図)

向田遺跡より出土した黒耀石製石器は第4図の1に図示した1点だけであった。第4図の1は二次加工が両面全域に及ぶ石鎌で、尖端は鋭利に、両脚の抉りは極めて深く作り出しており、中央付近の両端にわずかに突起しが認められていた。(2)は青チャート製のポイント状石器である。下端は欠損し、両面の二次加工はあまり丁寧に調整されていない、中央部がやや厚い形態を成している。

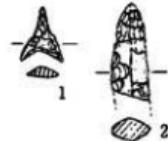
打製石斧 (第5図 (1~5))

打製石斧類は7点出土した。図示した以外の2点は小破片であった。完型品に近い形を呈しているのは5点であり、断面図からみて極めて分厚く調整されている。(2~3)は一左右の縁刃がほぼ平行状を呈し、いわゆる煙舟形態を呈している。(1)は下端部が欠損しているが、現存している形態から類推してみると、やや開き気味の撥形を呈すのであろう。(4)は他の打製石斧に比較して薄い点が特徴的である。硬砂岩(1~3)、緑泥岩(4)、閃綠岩(5)を使用している。

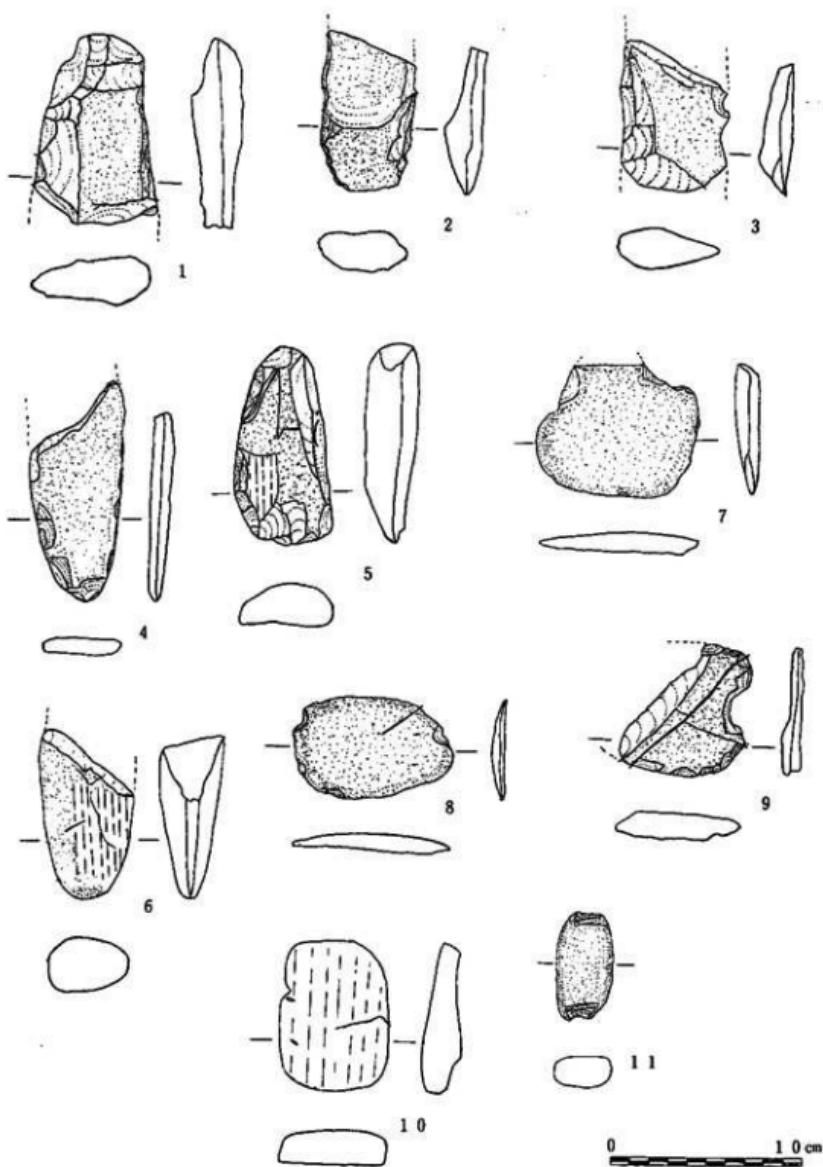
横刃形石器 (第5図 (7~9))

(9)は一般的には大型石匙と呼ばれているが、刃部が横型に作り出されている為に、一応、この部類に含めておいた。左半分は欠損しているが、見事なできばえである。軟質砂岩を用いている。

(7)の上部は欠損しているが、現存形態からみて、つまみ状の突起がついた大型石匙の仲間と推定できる。刃部の調整は極めて粗雑であり、硬砂岩を使用。(8)は一般的に言われている横刃形石器の典型的な形態を具备している。硬砂岩を使用。



第4図 石器実測図
(1:2)



第5図 石器実測図

磨製石斧（第5図（6））

いわゆる磨製石斧で、上端全面を欠損し、石器の片面にわたって研磨が認められる。一部に研磨以前の敲打痕が残存しており、本石器が敲打によって成形され、その後に研磨された工程によって製作されたのであろう。緑泥岩を使用。

石錐（第5図（11））

本遺跡出土の唯一の石錐である。構造的緑泥岩製の完型品であり、最大長5.6cm、最大幅3.1cm、重量は50gを測る。細長く、やや薄目の円盤を素材とし、上下両端に糸掛け用の剝離痕を備してある。

砥石（第5図（10））

方形形状に近い石の側面及び両面に研磨を加えて加工し、砥石としての機能を持たせている。片面は欠損している。緑泥岩を使用しているが、火熱を受けたとみえて赤々と変色している。砥石としてかなり長期間使用したとみえて、全面にわたってスペスペしていた。

第4節 古 錢（第6図）

第6図は向田遺跡のグリットの耕作土層中より出土した寛永通宝である。寛永通宝はざっと数百種類に分けられるほど多彩である。ただ大別すると古寛永と新寛永になる。これらの区別の仕方は字体によると言われている。以上の特徴点からみて、ここに掲載したのは新寛永に属していると思われる。



第6図 古銭拓影
(飯塚政美)
(1:1)

第V章 ま と め

単年度事業の緊急発掘ということで時間的制約があるため十分な考察及び検討を加えることはできないが、現時点においてわかることを記しておきたい。

向田遺跡一帯は前述したように自然的地形が複雑であって、遺構は何も検出されなかった。それに反して相当量の遺物の出土があった。これらの特徴点については前述してあるので、編年だけに限って記しておく。

茅山上層式 井戸尻式 曾利式 堀の内式 弥生後期中島式 平安時代の土師器 須恵器

中島式の出土は近年問題なっている弥生時代高地性集落の存在を確固たるものにしてくれるのに好事例となろう。

平安時代の遺物は豆良公の存在をある程度実証づけてくれた。

中世の陶器として室町後期の天目茶碗、室町後期の古瀬戸灰釉おろし皿が出土している。

発掘調査の北側の裏山は大明神と呼ばれ、現在でも祠を祭っている。伊那廻湛神巡行地の中に野口の場所が文明2年矢島文書の中にみられる。大明神とは当然諏訪神社を祭った所であることは明確であり、伊那廻湛の中にみられる野口はこの大明神一帯をさしているのであろう。従って向田遺跡周辺に室町期の陶器片が出土しても当然なことであろう。

石器としては、打製石斧 横刃型石器 磨製石斧 石錘 砕石が出土している。

新寛永通宝の出土があった。この古銭の出土はたったの1枚だけであったので、その意義づけには困難な点が多く潜んでいる。

(銀塙政美)

図 版



遺跡地を東側より眺む



遺跡地を南側より眺む

図版二
グリット設定及び地層



グリット設定



地層

図版三 発掘終了後のグリット状況



発掘終了後のグリット



発掘終了後のグリット

圖版四 遺物出土狀況



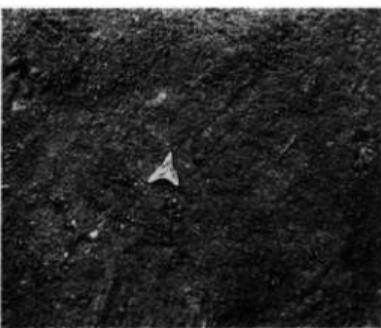
石器出土狀況



土器出土狀況



陶器出土狀況



石器出土狀況



石器出土狀況



石器出土狀況



①



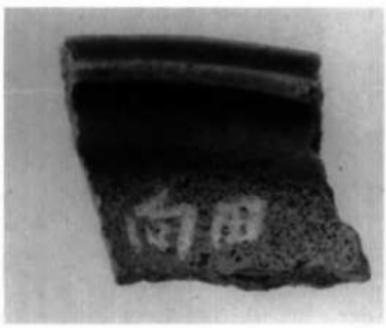
②



③



④



⑤



⑥

鳴神遺跡



目 次

目 次.....	(3)
挿図目次.....	(3)
図版目次.....	(3)
第Ⅰ章 発掘日誌.....	(5)
第Ⅱ章 造 構.....	(6)
第1節 住居址.....	(6)
第2節 土 壤.....	(11)
第Ⅲ章 造 物.....	(11)
第1節 土 器.....	(11)
第2節 石 器.....	(15)
第3節 鉄製品.....	(17)
第4節 古 錢.....	(17)
第Ⅳ章 ま と め.....	(17)

挿図目次

- 第1図 地形及び遺構配置図..... (7)
- 第2図 第1号住居址実測図..... (8)
- 第3図 第1号住居址カマド実測図..... (9)
- 第4図 第2号住居址・第1号土壤実測図..... (10)
- 第5図 第2号住居址カマド実測図..... (11)
- 第6図 土器拓影..... (12)
- 第7図 土器実測図..... (14)
- 第8図 石器実測図..... (15)
- 第9図 石器実測図..... (16)
- 第10図 鉄製品実測図..... (17)
- 第11図 古錢拓影..... (17)

図版目次

- 図版1 遺跡遠景

- 図版2 遺跡近景及びグリット設定

- 図版3 造 構

- 図版4 造 構

- 図版5 遺物出土状況

第Ⅰ章 発掘日誌

昭和61年10月21日 晴 本日より鳴神遺跡へ入る。グリットを縦道の北側へ設定する。グリットを設定したところは現況は休耕田となっており、ここをI区とする。グリットを東から西へA～E、北から南へ1～10と決め、1辺を2m×2mとする。A1から1つ置きに掘り下げていく、A1付近に相当量の遺物が出土した。C3の黒土層中に焼土が多量に堆積していた。

昭和61年10月23日

晴

昨日に引き続き、AラインとCラインのグリットを南へ南へと掘り進めていく。発掘予定地のA7グリットになると、昨日とはうって変わって50cm位で黄褐色土層に達する。遺物が少量出土した。



発掘風景

昭和61年10月24日 一日、C3グリット付近

で確認された焼土周辺を拡張する。遺物がやや出土した。

昭和61年10月28日 曇 焼土が確認された場所を拡張し、掘り下げていくと、灰釉陶器片、縄文中期の石器、縄文中期土器片が若干出土した。焼土の検出された周囲を焼土のレベルまで下げてみると、遺構の検出はなかった。

昭和61年10月29日 曇 I区の北側の畝をII区とし、この畝にグリットを設定する。1辺を2m×2mとする。

グリット名は東から西へA～E、南から北へ1～9とする。A1から掘り進めていくと、この区全体はかつては水田にしたとみえて、耕土を30cm位掘り下げて行くと地場層があり、地場層をとりのぞくと、すぐ直下にローム層がみえた。II区の北側の畝をIII区として、掘り進めていくと、この区の南側に落ち込みがみられ、これを第1号住居址と命名する。

昭和61年10月30日 晴 第1号住居址のプラン確認のため付近を拡張する。午後、本住居址の掘り下げを開始。この住居址は隅丸方形で、土師器、須恵器を出土する奈良時代の堅穴住居址で、カマドは東壁にあった。

昭和61年10月31日 晴 昨日に引きつづき第1号住居址の掘り下げを進め、夕方までには完了する。

昭和61年11月4日 晴 第1号住居址北西の一辺のグリットを掘り下げていくと、方形の黒い落ち込みがみられ、これを第2号住居址と命名した。

昭和 61 年 11 月 6 日 晴
第 2 号住居址のプラン確認
のため、付近地帯を拡張す
る。昭和 61 年 11 月 7 日 晴
第 2 号住居址の掘り下げを
する。カマドは東壁の中央
部付近にあり、石組粘土カ
マドで、煙道ははっきりし
ていた。全作業員をこの作
業に投入したので、夕方ま
でにはほぼ完掘しあわった。
土師・須恵器が出土し、奈
良時代の住居址となった。



住居址の掘り下げ風景

- 昭和 61 年 11 月 6 日 晴 第 2 号住居址の写真をとる都合上付近一帯を拡張する。
- 昭和 61 年 11 月 7 日 晴 前日と同様な作業をする。
- 昭和 61 年 11 月 8 日 晴 時々 曇 住居址の写真をとる都合上、西側と南側を拡張する。
- 昭和 61 年 11 月 10 日 晴 第 1 号住居址の床面と最後の仕上げ掘りを実施する。
- 昭和 61 年 11 月 11 日 晴 第 2 号住居址の床面と最後の仕上げ掘りをする。
- 昭和 61 年 11 月 12 日 晴 第 1 号住居址、第 2 号住居址の清掃及び写真撮影をする。
- 昭和 61 年 11 月 14 日 晴 第 1 号住居址、第 2 号住居址の実測を完了する。第 1 号住居址、第 2 号住居址のカマドの断面実測完了。全測図を作成する。
- 昭和 61 年 12 月～昭和 62 年 2 月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集、それを印刷所へ送り込む。校正も行う。
- 昭和 62 年 3 月 報告書を刊行する。

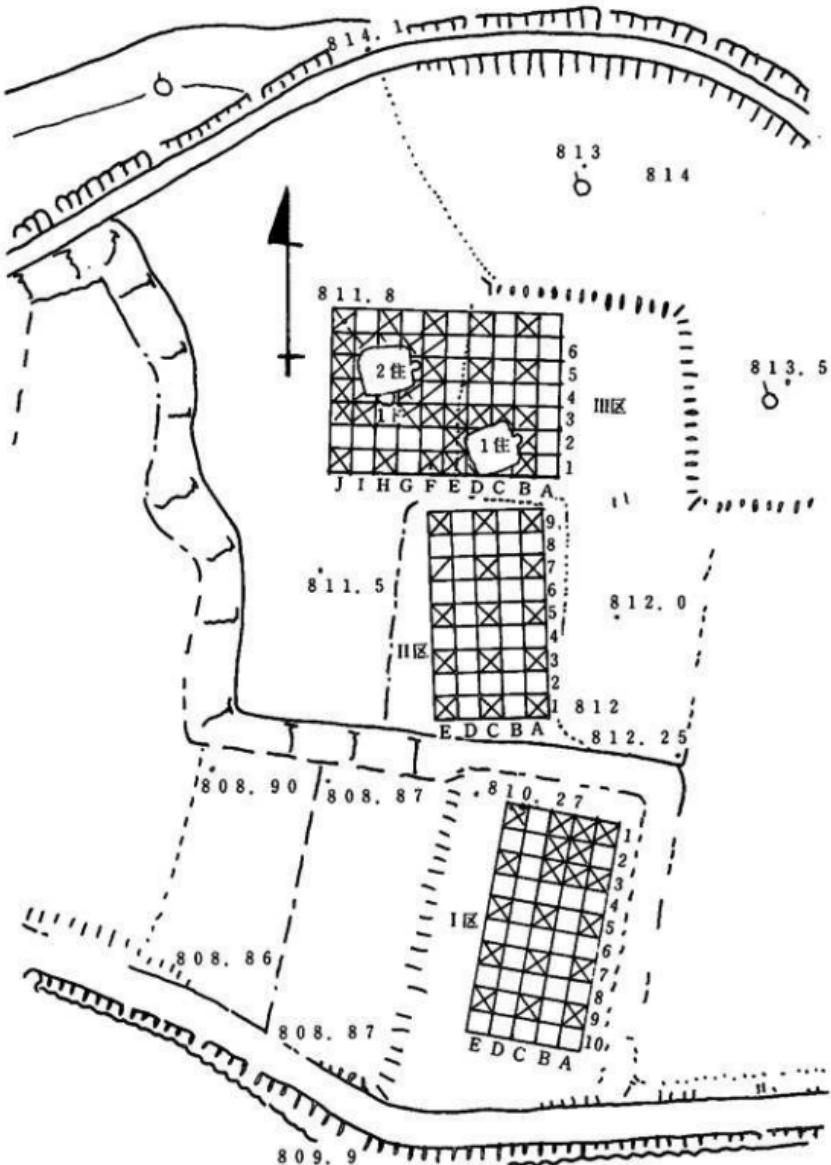
第 II 章 遺構

今回の発掘調査で検出された遺構は奈良時代竪穴住居址 2 軒、縄文前期終末期土壙 1 基であった。
もう少し、広範囲の調査を実施したならば遺構の検出はさらに増加したと思われる。

第 I 節 住居址

第 1 号住居址（第 2～3 図、図版 3～4）

本住居址の検出された場所は遺跡地の北の小高い丘陵地に位置し、後背には小さな山麓が東西に



第1図 地形及び造構配置図 (1:500)

進らなっていた。

三層上面においてプランの落ち込みが確認できた。住居址の検出された付近の土層は上から耕土、黒土、ローム層の順に堆積しており、従って本住居址はローム層を掘り込んで構築した形態となるわけである。

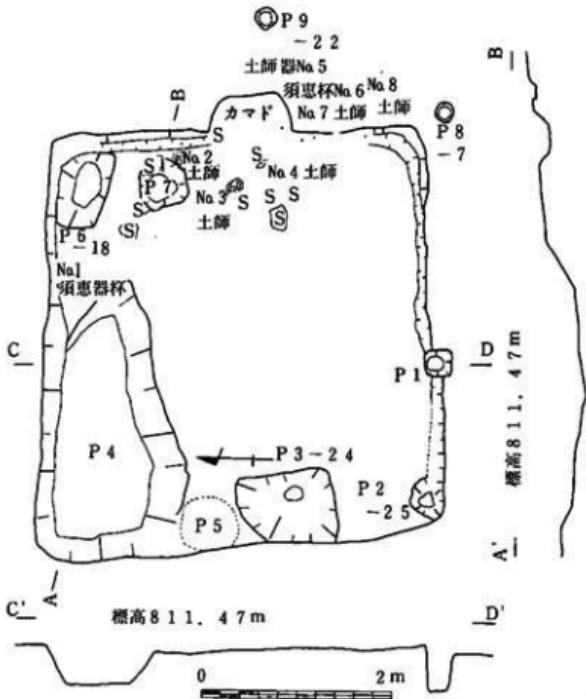
プランの確認できたローム層面までは約65cmを測り、南北4m5cm、東西4m40cm位を有する隅丸方形状の竪穴住居址となつた。

住居址が検出された付近の基盤は東から西へやや傾斜しているために、壁高は東側がやや高く20cm位、西側は数cm位の数値を示していた。壁面はやや凹凸があり、全般的に垂直に近くなつた。

覆土上層はやや堅い黒土層で、炭化物や細礫を少量含有し、覆土下層はやや黒味の薄い黒土層で、ローム質土粒や炭化物を若干含有していた。北西の一角に長円形状の大きな落ち込みがみられたが、なかから何んの遺物の出土もなく、その性格実態は把握できなかった。床面はローム層の深くに達しており、全般的には平坦であったが、ブロック的に凹凸が認められた。床面の硬度差はまちまちであった。カマドの存在する東壁付近は極めて硬く、カマドから離れるに従って軟弱度を増していった。

カマドは東壁の中央部付近にあって、当初は石組粘土カマドと推測されるが、今回検出された時点では破壊度が極めて高かった。壁外に煙道らしき痕跡がわずかに認められた。石組に利用した石は花崗岩と粘板岩が主であり、近くに産するものを利用したと想定できる。カマド付近の堆積地層を調査してみると第3図第1号住居址カマド実測図で示したようになる。

柱穴の配置は雑々であった。ただ南壁のP8、P1、P25は割合に整然としていた。北西の隅



第2図 第1号住居址実測図

にもきちっとした柱穴が存在していたと思われるが、前述したP 4によって破壊されたのであろう。遺物の出土は割合に少なかった。出土状態はカマド周辺に集中し、他は散在的となっていた。土師器、須恵器の出土が全てであり、それらの文様、胎土、その他諸々の特徴からみて奈良時代後半の住居址と判別できた。須恵器は下伊那郡系のものが多く含まれていた。

第2号住居址（第4～5図、図版3～4）

本住居址は第1号住居址の北西に発見された。この一角をグリット名で呼ぶと次のようになる。III区G 4、H 4、I 4、III区G 5、H 5、I 5、III区G 6、H 6、H 7。

発掘調査の比較的初期の段階では土器片等が出土していたが、水田造成時の地場層がかなり厚く、しかも深い層にまで達していたために、落ち込みの確認面の検出がなかなか掌握できず、その結果として遺構のプラン確認も遅れてしまった。

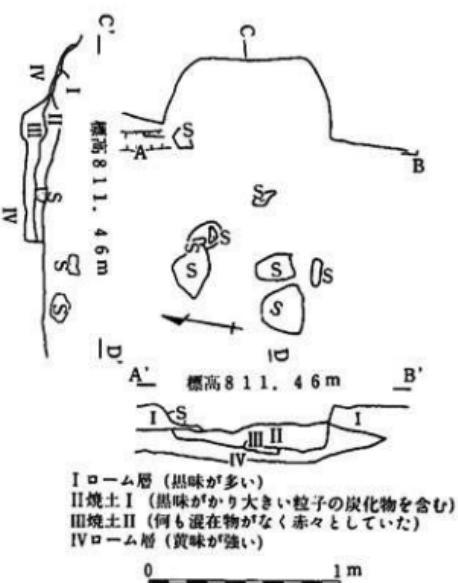
結果的にみて、本住居址は表土面から70cm位のローム層を掘り込み、南北3m70cm位、東西4m70cm位の規模を有し、隅九方形状の竪穴住居址となった。

ロームの基礎が東から西への傾斜のため、壁高は東、北は高く、西側は低くなっている。前者の高さは30cm位、後者のそれは数cm位とそれぞれ測定できる。壁面は全般的に軟弱で凹凸が多く、全般的にはやや外傾気味となっていた。

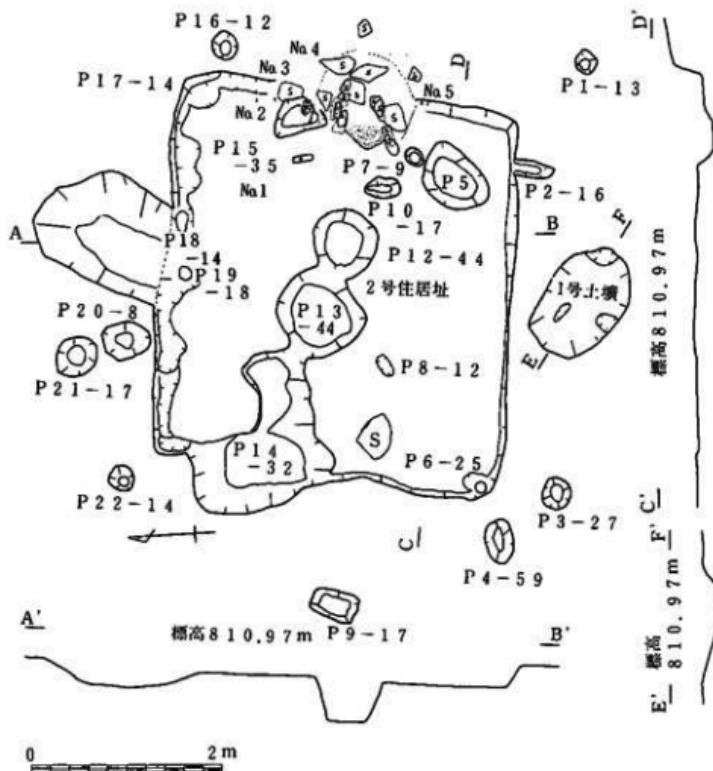
住居址を全面的に埋め尽くしていた覆土は上下2層に大別が可能である。上層は黒色土の中に大きなローム粒を含む地場層の混合土層、下層は粒状がこまかく粘性に富む、しまった黄味の強い褐色土層で、やや炭化物粒や焼土粒を含み、質的には地山のローム層に近似していると言える。土質的にみて、下層は自然埋没状況を呈し、上層は水田造成時に人為的に埋め戻したと推測される。

床面はやや凹凸があり、全般的にかたくなっていた。カマドの存在する東壁付近は極めて堅く踏み固められているために、見事な光沢を放っていた。このような状態であったために、覆土下層面を掘り下げていくと、床面直上で、覆土が板状にきれいに剥ぎ取れるように掘れた。当時の生活はカマドを中心として行われたために、その付近だけ固くなってしまって何も不思議ではないと思われる。

柱穴は全般的にみて壁外に集中している傾向が強いようにみえ、建物構造上何か問題点があるのではないだろうか、東壁の北半分から北壁全体にわたって周溝が存在しており、その用途は明瞭にはわからない。床面中央部に存在するP 12、P 13からは多量の焼土と木炭が検出され、灰溜めに利用したのではないだろうか。この灰溜めの焼土堆積量からみて、本住居址はかなり長期間の居住が



第3図 第1号住居址カマド実測図



第4図 第2号住居址・第1号土壙実測図

想定できるのではないだろうか。この問題を究明するには出土遺物の細部構年を十二分に考慮すべきであろうことは誰れもが気付く点であろう。

カマドは東壁中央部付近に存在し、その形態は石組粘土カマドである。カマドに使用した石は大部分花崗岩や粘板岩であり、長期間にわたって燃焼されたとみえて、赤々と変色し、花崗岩のよう崩壊しやすいのには幾筋もの亀裂がみられた。このカマドの残存状態は極めて優秀で、支脚石、両袖石、天井石等ががっちりと組み込まれた状態が判然としていた。

前述したようにカマドの石の組み込み状況及びその断面は第5図第2号住居址カマド実測図に掲載してあるので、参考にして下さい。

遺物は土師器、須恵器が相当量出土している。出土状態は第1号住居址同様カマド周辺に集中化の傾向がみられ、他は散在的となる。須恵器は県外から移入品と、県内からの移入品とに大別でき、第1号住居址とは何か異質な感がする。出土した土師器、須恵器の構年からみて奈良時代後半の住居址と考えられる。

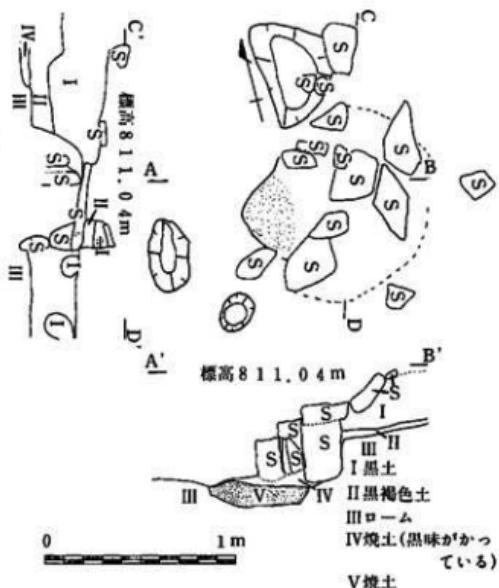
第2節 土 壤

第1号土壤 (第4図、図版3)

本土壤は第2号住居址の南壁に近接して発見された。表土面より70cm位下ったローム層面を掘り込んで構築してあり、南北95cm位、東西1m5cm位の規模で、長円形状の平面プランを呈している。

壁面は四壁ともやや外傾気味で凹凸が多くなっている。四壁とも高さは10~20cm位と浅く、断面はタライ状を成していた。

床面は軟弱で凹凸が多くなっている。床面近くの覆土下層面から縄文前期終末期の土器片が数片出土した。従って本造構は縄文前期終末期の土壤である。



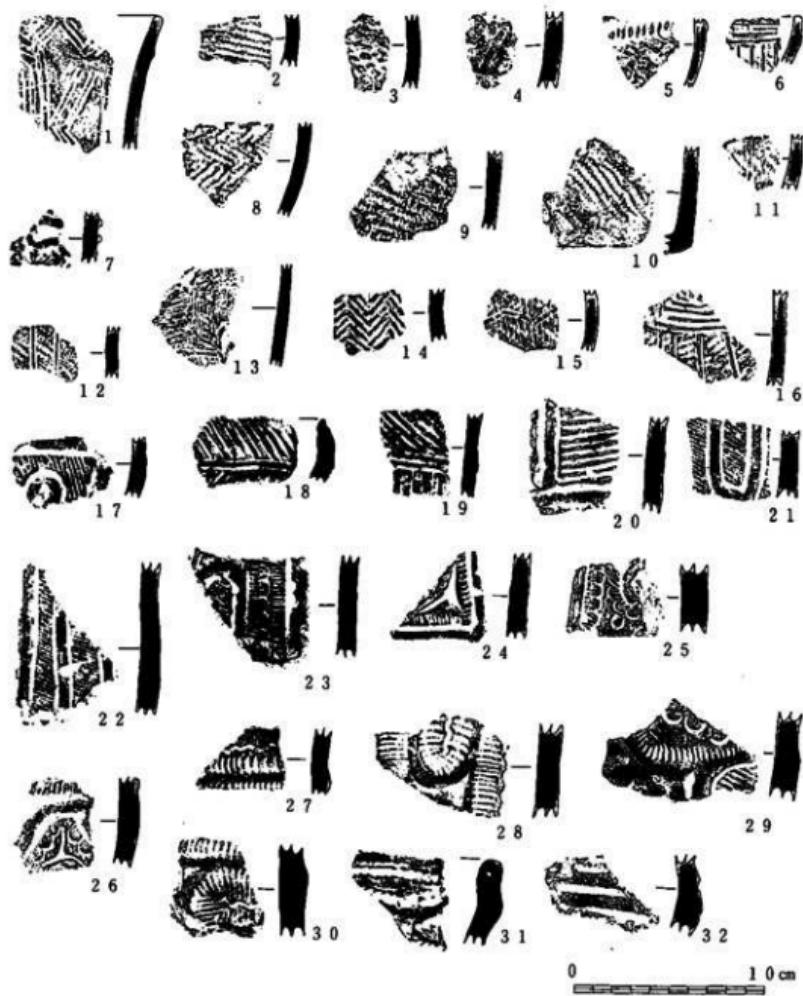
第5図 第2号住居址カマド実測図

第III章 遺 物

第1節 土 器 (第6~7図)

第6図に掲載した土器片は全て縄文土器である。(1~2)は第2号住居址の南側、第1号土壤より出土。(1)はわずかに外反する口縁部破片で、先端が鋭い竹ベラを用いての半削竹管文がほぼ平行状に斜走している。黒褐色を呈し、焼成は普通で、多くの長石粒が露出している。器表全面にわたって斜縄文が施されている。黒茶褐色を呈し、焼成は良好で、多量の雲母を含んでいるので、ピカピカ光っている。(1~2)は縄文前期終末期の下島直後形式に類似していると思われる。

(3~4)は横円押型文を押捺してある一派である。(3)は横円の大きさが小さいとの、中位のとが混在し、(4)は横円がやや大き目である。(3)は茶褐色、黄褐色(4)を呈し、焼成は双方とも普通、さらに双方とも少量の石英、長石を含んでいる。(3~4)ともに細久保式に含まれると思われる。(5)は斜縄文地へC字状の大型爪形文を横位状に施してある。黒褐色を呈し、焼成は普通で、胎土中に少量の長石や雲母を含む。関西の北白川下層III C式に含まれると思われる。(6~7)は斜縄文地へ細い粘土紐を貼り付けてあるもの。黒褐色(6)、赤茶褐色(7)を呈し、焼成は双方とも普通、並び少量の長石粒を含む。関西地方に盛隆した大歳山式の部類に属していると思



第6図 土器拓影

われる。羽状網文（8）、斜網文（9～19）が見事な一派である。胎土中にはんの微量の纖維を含む、焼成は全般的に普通で、赤褐色を呈している。黒浜式の一派であろう。

(11～15)は半割竹管文の発達が顕著なもの。半割竹管の組合せには各種があり、それを記すと次のようになる。斜網文地へ細く、鋭い沈線を施したもの（11～13）、無文地へ沈線を施したもの（14、15）である。明黄褐色（11～15）、黒褐色（12～13）、赤褐色（14）を呈し、焼成は5片とも普通である。下島直後形式の一部と思われる。

(16～19)は沈線文がある程度画一的に、また意匠文様に加飾されている。明茶褐色（16）、赤褐色（17）、黒褐色（18～19）を呈し、焼成は全般的に良好であった。梨久保式に含まれると思われる。(20～23)は縦位状の区画文が主流文様を構成しているが、区画文内には単純な沈線が施されているに過ぎない。赤褐色（20）、明黄褐色（21～23）を呈し、焼成は全て良好、少量の長石粒を含む。(21～23)は色調及び文様の状況からみて同一個体と推定できる。藤内I式期の文様を明瞭に描出している。

(24～30)は井戸尻期特有のキヤタビラ文が隨所にみられるもの。明茶褐色（28～29）、明赤褐色（24）、明黒褐色（25）、赤褐色（26～27）、明黄褐色（30）を呈し、焼成は全般的に普通となっている。含有物はわずかに少量の長石を含む。(31)は無文地に幅広ろの隆帯を付け、その縁及び器面に爪形文をつけてある。赤褐色を呈し、焼成は良好で、少量の長石を含む。井戸尻期最終末であろう。

(32)は無文地に低く、幅広ろの隆帯を横位に貼り付けてある。明赤褐色を呈し、焼成は良好で、少量の長石を含む。曾利期の一派であろう。

第7図（1～6）は第1号住居址内より出土した遺物である。（1）は土師器の小型甕で4分1程残存していた。従って図上復元に基づいた実測をこころみた。口縁はくの字状に屈曲し、最大径を胴部に持つ。器肉は薄く、刷目が横走している。赤褐色を呈する。（2～4）は黄褐色を呈し、刷目が縦走している。（3）は土師器甕の底部片である。木葉底（3）、糸切り底（4）を呈している。

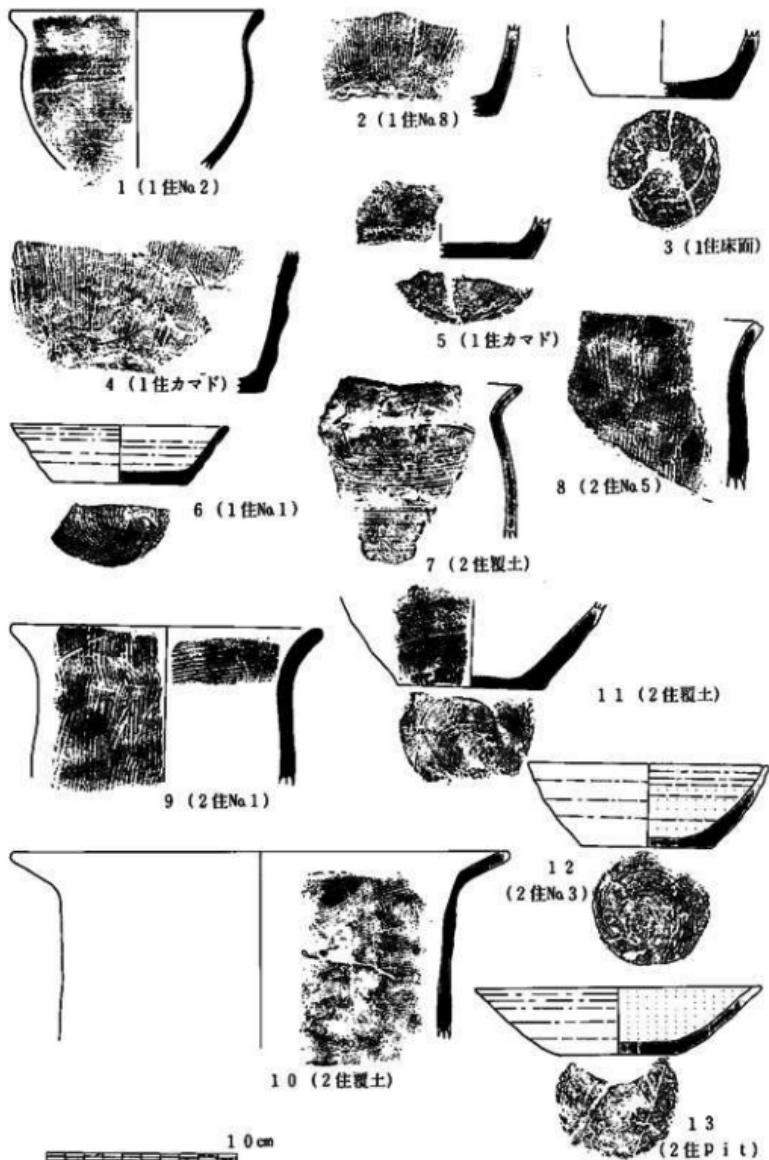
（3）は黒褐色を呈し、多量の雲母を含む。（5）は赤褐色を呈し、少量の長石を含む。（6）は須恵器の杯であり、ロクロ痕及び糸切り痕が明瞭である。

第7図（7～13）は第2号住居址内より出土した土師器であり、（12）はほぼ完型品に近いが、他の者はわずかの断片を利用して図上復元をこころみたのを掲載してある。（7）は小型甕の部類に含まれよう。土師器独特の赤黄褐色を呈する。これは（8）も同様である。（8）は長胴甕の部類に含まれると思われる。

（9～10）は口縁部で大きく外方に開く、口縁は短い。胴上部から直立し、底部までほぼ直立状を呈する長胴甕である。器内は（9）はやや厚め、（10）はやや薄めである。（9）の内外面には刷目がみられる。

（11）は長胴甕の底部破片と思われる。外面に刷目が横走し、糸切り底部を有する。（12～13）は内黒の杯である。（12）はやや塊状に近く、深目であるのに対し、（13）はやや皿状に近くて浅目である。底部はともに糸切り底である。

（第7図）の番号の横に記した名称を出土地点を明示してある。N〇については第2図第1号住居址実測図、第4図第2号住居址・第1号土壤実測図を参照して下さい。



第7図 土器実測図

第2節 石 器 (第8～9図)

今回の発掘調査で出土した石器は22点あったが、その形態をとどめ実測可能なのは第8～9図に掲載した11点だけであった。他の11点は細片であり、その形態及び機能が把握できる状態ではなかったので、今回の報告書からは割愛したので御承知願いたい。

石器 (第8図 (1～2))

今回発掘調査で出土した石鎌は第8図に示した2点だけであった。(1～2)の2点は、一般的な石鎌に比較すると大型の部類に属している。横断面形は1は比較的薄く、やや凹凸を呈するが、全般的には平坦に近い状態を成している。2は比較的薄く、中央部が鋭角状に尖がっているのが、それぞれの特徴点である。(1)は先端部と左脚部分がわずかに欠損しているのに対し、(2)は完型品である。(1～2)の部分的な特徴点を記すと次のようになる。(1)はややハート形に近く、先端は尖気味を呈し、両脚部の抉り込みがやや多い。(2)は両脚部の抉り込みが少なく、三角形状に近く、先端部の幅はやや広く、また尖り状態はゆるやかである。



打製石斧 (第9図 (1～6))

今回の調査で出土した打製石斧は7点である。第9図の石器実測図に掲載した以外の1点は破片が小さく、その実態が把握できなかつたので、今回は図化しなかつた。

(1)は最大長14cmを計り、下端部が開く。打製石斧の分類上からみて撥形を呈するという表現になる。大型の部類に属し、完型品という面からみて価値が高いと言えよう。硬砂岩を利用。(2、4)はともに上・下部の両端が欠損していて、原長は短いが、製作時には推測するに15cm前後の大型品ではなかつただろうか。下部の両縁辺がやや開き気味を呈する撥形と思われる。ともに硬砂岩を利用。

(3)は小型品であるが、第二次加工が不十分で、素材の剥離面を多く残している。上端部が欠損している。硬砂岩を利用。両側端が直線状を呈する短冊形を呈す。

(5)は大部分が欠損してしまって、下端部が部分的に残存している程度である。短冊形を呈し、刃部は鋭利状を成している。軟質砂岩を利用。(6)は上端部が欠損し、やや撥形を呈し、片面加工の傾向が強く、扁平気味状態を形成している。硬砂岩を利用。

磨製石斧 (第9図 (7))

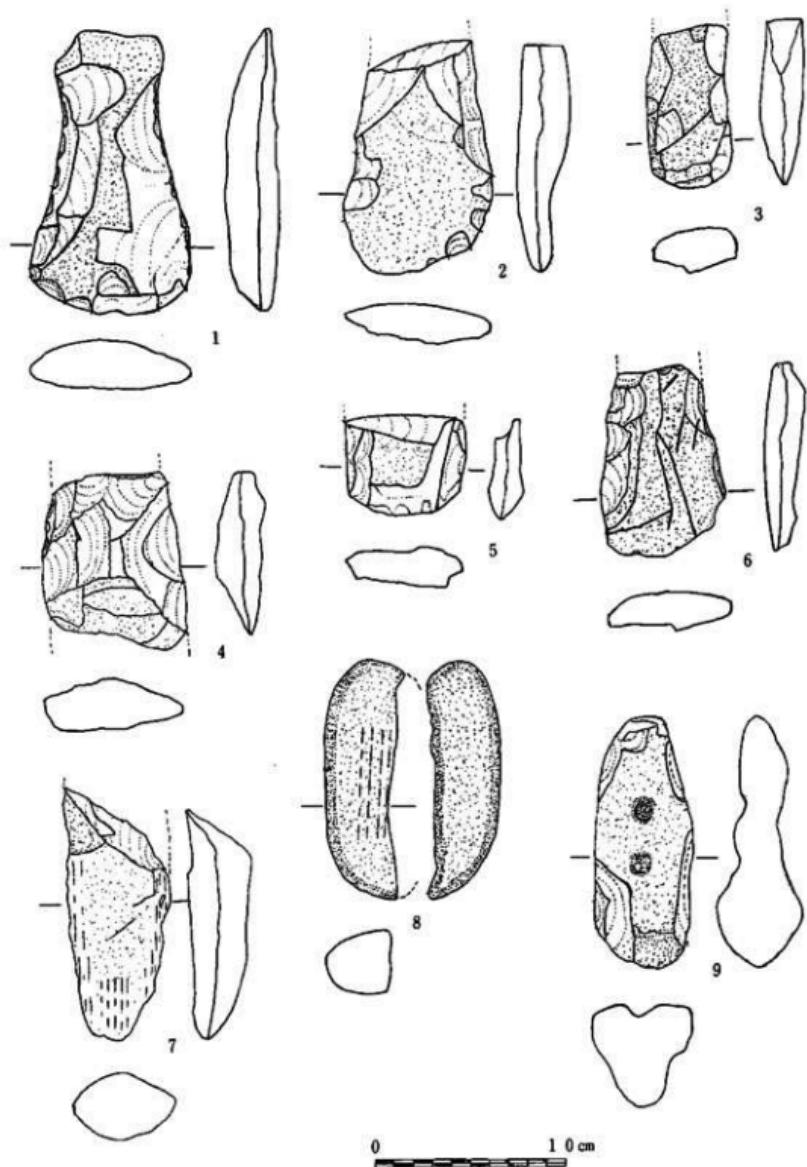
(7)は乳棒状磨製石斧で、上端部は欠損し、片面が研磨されているに過ぎない。先端部には敲打痕を認め、何種類かの使用方法があったと想定される。緑泥岩を利用。

磨石 (第9図 (8))

(8)は長楕円状の石を利用しての磨石であったが、現存は節理から完全に半分に割れてしまつて半月形を呈している。研磨の状態は極めてわずかであった。硬砂岩を利用。

凹石 (第9図 (9))

三面に明確なる凹みを有する凹石であり、平面形態は方形状に近い橢円形を呈している。主要な凹みは3面とも2個づつを有している。凹みの形態は同心円状に中央へ行くにしたがつて直径が



第9圖 石器実測図

狭くなっていく。軟質砂岩を利用。



第3節 鉄製品（第10図）

第10図 鉄製品実測図
(1:2)

第1号住居址より出土した刀子である。現長は6.6cmを計る。腐殖状態が進み、鋒者部分の銳利さはみられない。

第4節 古銭（第11図）

グリット内の耕土中より出土した寛永通宝である。寛永通宝はざっと数百種類に分けられるほど多種である。字体からみて、古寛永と新寛永に大別される。従って、本図に掲載した寛永通宝は新寛永に属すると思われる。

(飯塚政美)



第11図 古銭拓影

第IV章 まとめ

1. 鳴神遺跡は伊那市手良野口竜の沢川地籍では有名な遺跡として知られており、ここに農業構造改善事業が実施されることになり、伊那市教育委員会が主体となって、発掘調査は昭和61年10月21日から昭和61年11月14日にわたって行われた。
2. 遺跡の面積はかなり広範に達していた。発掘調査期間、費用は限定され、また、耕作地による制限があったために小範囲の調査に終わった。小範囲の地区決定にあたっては表面採集及び付近の耕作者の意見によった。
3. 選定した区域に存在した遺構は縄文前期終末期の土壙1基、奈良時代後半住居址2軒であった。
4. 縄文前期終末期の土壙からは下島直後形式の土器片が出土。奈良時代後半の住居址からは下伊那産の須恵器の出土をみた。下伊那産とは宮洞窯が該当すると思われる。下伊那産の須恵器の他に県外からの移入品も含まれていた。須恵器に混じって土師器も相当量発見された。
5. 奈良時代の竪穴住居址はともに単一で発見され、隅丸方形を呈し、東側に石組粘土カマドを有していた。
6. 主なる出土遺物（特に土器）を縦年に記すと次のようになる。

縄久保式 北白川下層III式 下島直後形式 黒浜式 梨久保式 藤内I式 井戸尻式 曾利式
石器の機能的分類は次のようになる。

石鎧 打製石斧 磨製石斧 磨石 凹石 その他の遺物として刀子 寛永通宝がある。

奈良時代後期の住居址が2軒検出されたが、即これからは允良公に結びつけるわけにはいかない。
ただ、同時期に竜の沢川の谷間にかなりの数の住居址の存在が想定できる足掛りとなったことは確
かである。

(飯塚政美)

図 版



遺跡地を東側より眺む



遺跡地を西側より眺む

図版二 遺跡近景及びグリット設定



遺跡地を南側より眺む



グリット設定後



第1号住居址



第2号住居址及び第1号土塁



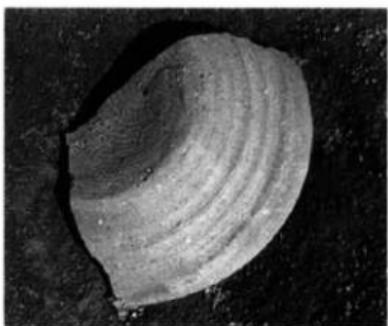
第1号住居址カマド



第2号住居址カマド



陶器出土狀況



陶器出土狀況



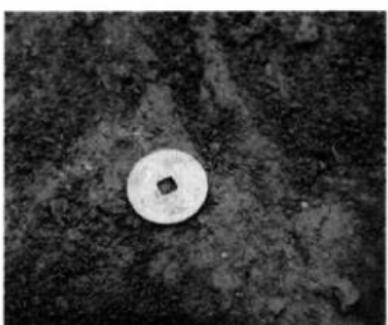
土器出土狀況



土器出土狀況

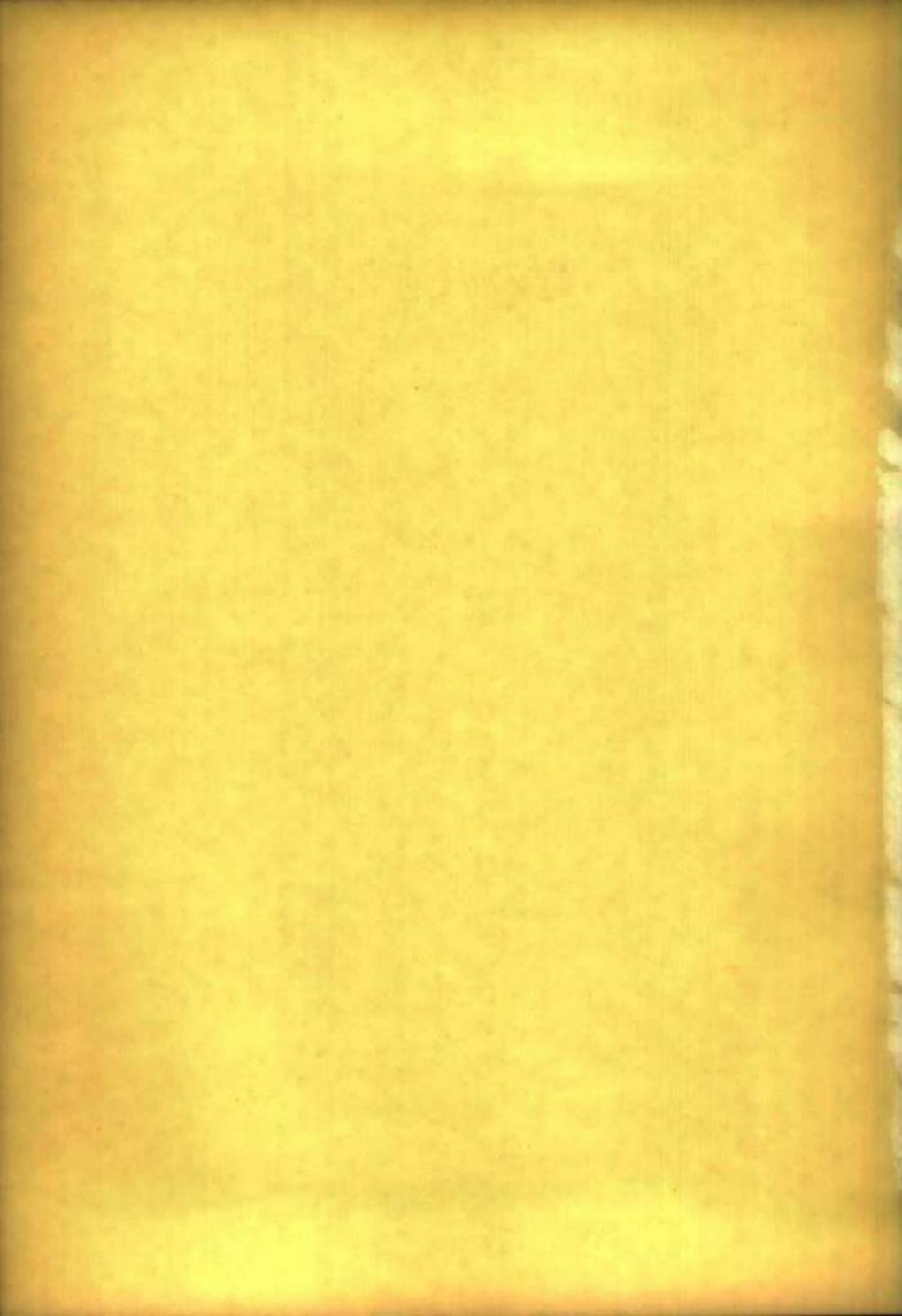


鐵製品出土狀況



古錢出土狀況

竜の沢遺跡



目 次

目 次	(3)
挿図目次	(3)
図版目次	(3)
第Ⅰ章 発掘日誌	(5)
第Ⅱ章 地 層	(5)
第Ⅲ章 遺 構	(6)
第Ⅳ章 遺 物	(6)
第1節 土 器	(6)
第2節 石 器	(6)
第Ⅴ章 まとめ	(9)

挿図目次

第1図 グリッド地層図	(6)
第2図 地形及びグリッド配置図	(7)
第3図 土器拓影	(8)
第4図 石器実測図	(8)
第5図 石器実測図	(9)

図版目次

図版1 遺跡遠景

図版2 グリッド発掘状況及び地層

図版3 遺物出土状況

第Ⅰ章 発掘日誌

昭和 61 年 11 月 26 日 晴

本日より竜の沢遺跡へ入る $2\text{m} \times 2\text{m}$ のグリットを設定する。グリット名は西から東へ A ~ I、北から南へ 1 ~ 12 とし、1つ置きに掘り始める。A 1、C 1、A 3、C 3、A 5、C 5、A 7、C 7 と掘り進めていくと、ローム層まで約 1 m あり、かなり深くなっている。

打製石斧、礫器、石皿、縄文中期初頭、加曾利 E 式土器等片が出土した。

昭和 61 年 11 月 27 日 晴 本日よりグリット掘りを南、東へ進めていくと、ローム層までの深さはやや浅くなってきた。遺物の出土は前日に比較して極めて少なくなる。

昭和 61 年 11 月 28 日 晴 グリット掘りを東、東へと掘り進めていく。東側のグリットはローム層まで浅く 30 cm ~ 50 cm 位であった。

昭和 61 年 11 月 29 日 晴 前日と同様な作業をする。グリットの地層図及び全測図を作成する。本日をもって竜の沢遺跡の発掘を終わる。

昭和 61 年 12 月 ~ 昭和 62 年 2 月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集、それを印刷所へ送り込む。校正も行う。

昭和 62 年 3 月 報告書を刊行する。



発掘風景

第Ⅱ章 地層

今回、発掘調査を実施した地点は竜の沢川に面して、南西にやや傾斜しており、日当りが良好で、背後に山が連なっていた。発掘調査を実施した地区と竜の沢川との北高差は 15 m 位あった。発掘調査を実施した地区は割合に安定していたとみえて、ローム層が相当量堆積していた。

A 3 ~ A 4 ラインにかけての地層図を第 1 図に掲載しておく。層序関係を上から順に記すと次のようになる。耕土、砂層（黄味が強く、乾性で粒子が細かい）、黒褐色土層（細粒で乾性に富む）、茶褐色土層（細粒で乾性に富む）、茶褐色土層（ロームブロックを多く含む）、ソフトローム層。第 II 層目の砂層は上からの押し出しによる堆積かと思われる。

第三章 遺構

今回の発掘調査地区内の遺構の検出は全くなかつた。土器や石器等の遺物の出土からみて、もう少し広範囲の発掘調査を実施すれば、十分に遺構の検出はあり得る。

第四章 遺物

第一節 土器

第3図(1)はグリット内より出土し、文様帶は三種類になっている。破片の上部文様は斜縄文地に沈線が縱走、中部文様は無文地に沈線が横走、下部文様は無文地に沈線が縱走している。赤褐色を呈し、焼成は普通で、少量の長石を含む。(2)は(1)と同一個体と思われる。(1~2)は縄文中期初頭梨久保式に類似していると思われる。

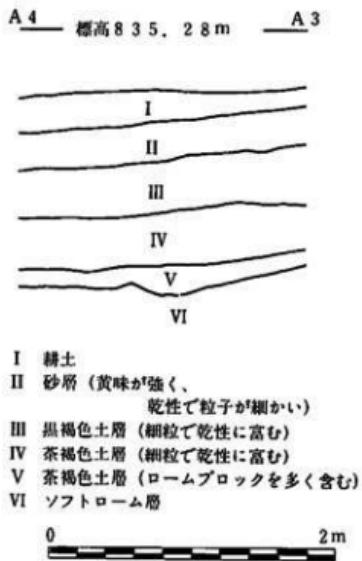
(3)はグリット内から出土。無文地へ幅広ろの隆帯を縱位に垂下させ、そのすぐ縁から左横にかけて沈線を平行状に横走してある。黄褐色を呈し、焼成は良好。胎土中に少量の長石、雲母を含む。(4)は無文の土器片である。明黄褐色を呈し、焼成は普通、胎土中に少量の長石粒を含む。(3~4)は加曾利E期の土器片であろう。

第二節 石器

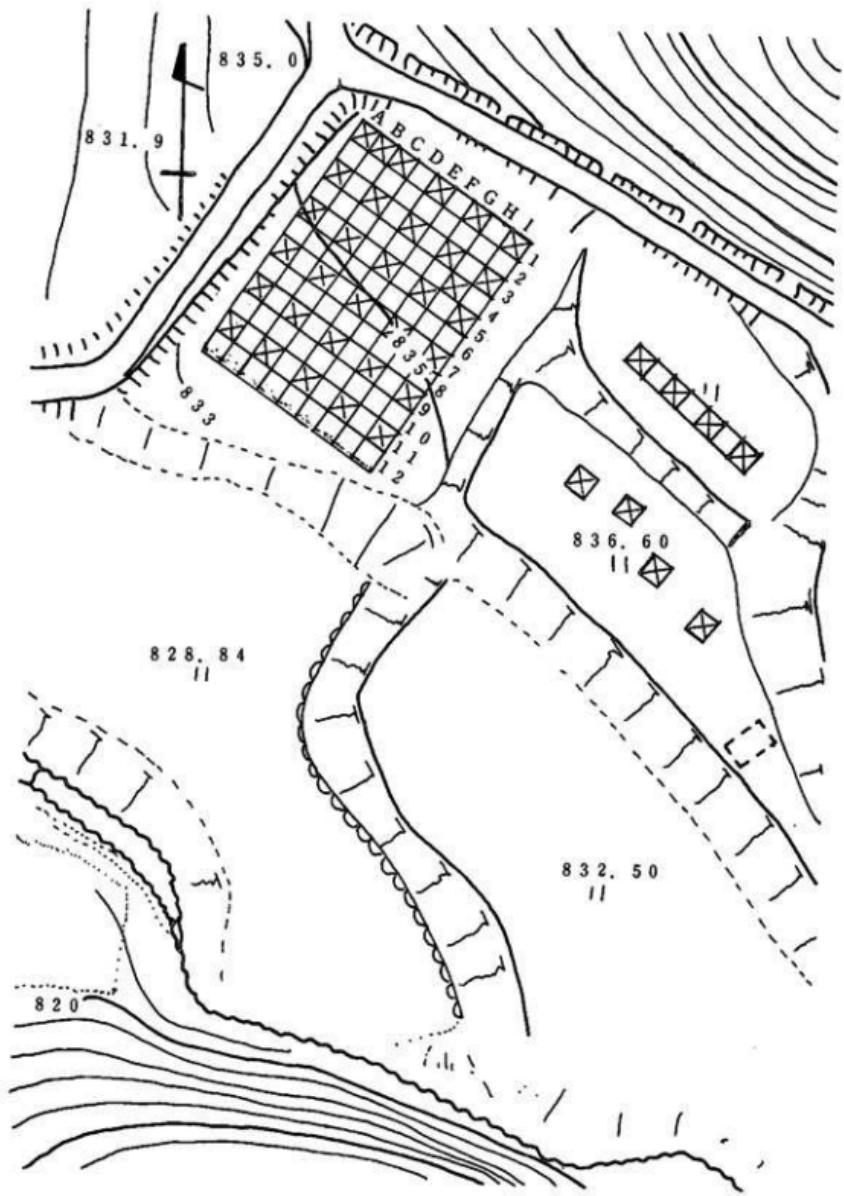
第4図の(1)はグリット内より出土した敲打石の一種と思われる。長楕円形状の石の周囲及び表面を利用したのであろう。ところどころにタタキ痕や擦痕がみられる。上部は石の節理に従って破損してしまっている。硬砂岩を用いている。

(2)は石皿の破損品で、グリット内より出土している。現存長15cm位を計り、比較的中型に属していると思われる。機能部分である凹面はややなだらかな傾斜を示し、よく研磨されている。現存している部分から察して方形状に近い形態を成している。火熱を受けたとみて、部分的に変色している個所が随所に認められる。花崗岩を利用している。

第5図(1~2)は打製石斧であり、下端が直線状になるいわゆる短衡形を呈す。(1~2)ともに上端部が全面的に欠損してしまっていて、打製石斧としてあまり優品ではない。



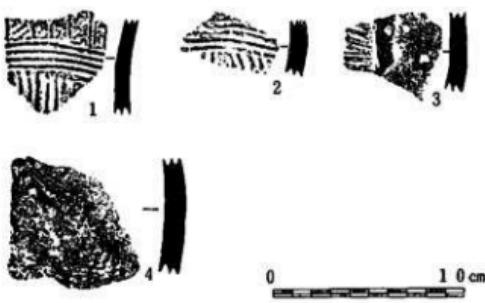
第1図 グリット地層図



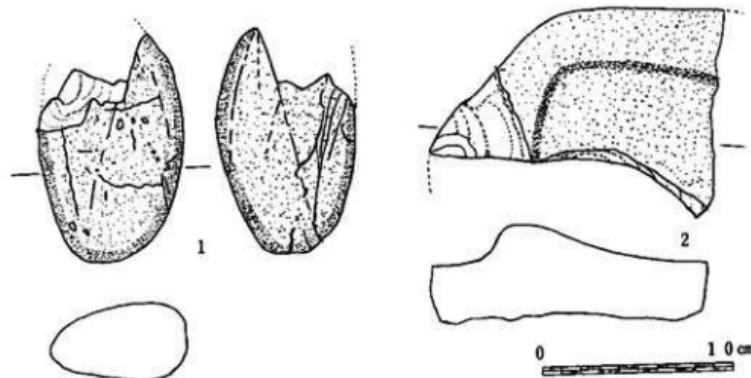
第2図 地形及びグリット配源図 (1 : 500)

(1)は先端の刃部がややふ厚くなり、それに対し、(2)は先端がやや鋭利になっている。二次加工が十分でなく、素材の剥離面を広く残し、刃部の作出しは少なく、従って刃部に当たる縁辺には表裏ともに多くの自然面が残されている。とともに硬砂岩を利用している。グリット内の出土であるが、形態からみて縄文中期の所産と推測できる。

(3～4)は敲打器の部類に属している。円形状の硬砂岩の一部分を打ち欠いて刃部をつけ石器としての体裁を整えていく。(3)はやや厚く、(4)は扁平状を呈す。今回の発掘調査では縄文早期の土器片は1片も出土しなかったが、形態からみて、縄文早期によく出土するとの類似点を多く見い出す。
(飯塚政美)



第3図 土器拓影



第4図 石器実測図

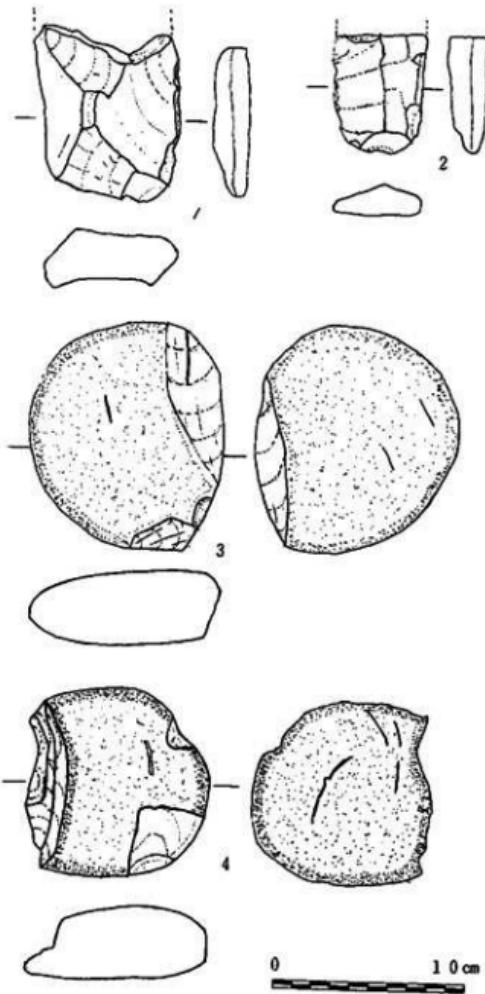
第V章 まとめ

竜の沢遺跡は竜の沢川の谷間存在する遺跡群の中で最も標高の高い所に位置し、しかも豆良公の存在を裏付けできる大百濟毛・小百濟毛の最短距離に位置していた。

実際に発掘調査を実施してみると、遺構は何一つも発見されなかった。また最も期待していた奈良・平安期の遺物は全く出土しなかった。

出土した遺物は縄文中期の土器片4点、これらは梨久保式・曾利式に含まれる。石器としては石皿・打製石器・敲打器が出土している。

(飯塚政美)



第5図 石器実測図

図 版



遺跡地を南側より眺む



遺跡地を東側より眺む

図版二 グリット発掘状況及び地層



グリット発掘状況



地層

圖版三
遺物出土狀況



土器出土狀況



石器出土狀況



石器出土狀況

山伏塚古墳・向田・鳴神・竜の沢遺跡

—緊急発掘調査報告書—

昭和62年3月17日 印刷

昭和62年3月19日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 ほおづき書籍株式会社

